

---

# ～ 三人目の予言の子～

たれ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

～三人目の予言の子～

### 【Nコード】

N1852T

### 【作者名】

たれ

### 【あらすじ】

現代日本人だった主人公、気付いた時には何故か赤ん坊の姿に、しかもそこはNARUTOの世界だった。

オリジナル転生主人公『月影レイ』がおりなす、チート最強主人公ハーレム系の物語。

苦手な人はすぐに戻るを。

単行本のための知識でやります。

初心者作者が書く拙い文章の処女作ですが、温かい目で見守って下さい。

誤字脱字突っ込み感想受付中。

但し、作者は初心者な為出来るだけ優しい言葉をお願いします、切実に…。

## 【序章】前世

俺にもちゃんと家族はいた。

父さん、母さん、そして妹。

だけど俺が小学二年生の時に、俺一人を残して事故で亡くなったのだ。

それから俺は親戚中をたらい回しにされた。

家に居ても居場所はなく、常に厄介者を見るような目を向けられていた。

家にいたくなかった俺は、中学に入った時からバイトを始め一人暮らしをするために貯金を始めた。

バイトが終わってまだ早い時間なら家には帰らず、本屋で漫画を読んだりして時間を潰した。

コンビニで弁当を買い、親戚の家に帰る。

「ただいま」と言ってもいつものように返事はこない、だからいつものようにそのまま自身の部屋に入るのだ。

干渉されないから、干渉しない。

一緒の家に住んでいるが家族ではない。

それが俺の生活であり人生だった。

高校を卒業するまでコツコツとバイト代を貯めた。

勿論半分は毎月生活費として親戚に渡している。

それでも無駄遣いせず頑張って貯めた貯金だ。

高校を卒業し、漸く一人暮らしができる。

そう思っていた。

だが、俺は甘かったのだ。

卒業式の日、帰ってきた俺に親戚が珍しく話し掛けてきた一言は、祝いの言葉なんかじゃ勿論なく――…

「今までの生活費は貰った。だけど、これまでかかった学費もちやんと払えよ、貯金あるんだろ」

信じられなかった。

俺は初めて声を張り上げ、反論した。

親が残した遺産もあったはずだ。

今まで住んでいた家を売ったお金も入ってきたはずだ…と。

だが返ってきた言葉は、俺には酷なものだった。

「そんなの親戚一同で分けてしまっただけで残ってるわけないだろうが、それはそれ、これはこれだ」

頭の中が真っ白になった。

次の瞬間、俺は無意識に親戚に掴みかかっていた。

服を掴み合い、何をするでなく本能のままに揺らしまくる。

しかし、ろくに運動もしていなかった俺が大人相手に力でかなうはずもなく、簡単に俺は勢いよく突き飛ばされていた。

ガッ——…

そして後頭部に響く衝撃。

後頭部に違和感を感じ触ってみると、生暖かいヌメつとした感触。

思わず手を見ると、そこはどす黒い赤色の血で染まっていた。

頭が割れたのか…？

こんな簡単に…？

視界が揺れ、目が霞んでいく。

俺は、これで死んでしまうのか？

段々意識が遠のいていく。

もう目を開けておくこともしんどい。

ゆっくりと瞼を閉じていく。

霞んだ視界、最後に見たのは顔が青ざめ呆然としている親戚の姿だった…。

ざまーみる…。

そんな場違いな事を思いながら、俺の意識は闇へと落ちた。

## 【一話】転生初日

——ここはどこだ…？

体が自由に動かない。

朧気な視界に写るは、見覚えのない天井、そして見慣れない人達の顔。

——お前らは誰だ…？

何故俺の顔を覗き込む…、何故そんなに笑っているんだ？

問い掛けようとするが何故か言葉が出てこない。何故だ？今一度腹に力を込め、絞り出すように喉から声を出してみる。

「あうあうあー？」

漸く絞り出した声は、喘ぎにも似た言葉とは言えない音の羅列だった。そしてそんな俺の声に嬉々として反応し、はしゃぎ出す目の前の男女。

片や黒髪を無造作にオールバックにし、ダンディに顎髭を生やした

壮年の男性。少し歳をとっているがさぞかしモテるだろうその顔は、今は破顔し弛みきった笑みを浮かべている。

片や銀髪のサラサラな髪を腰まで伸ばした、優しそうな笑みを浮かべる女神のような綺麗な女性。

芸術品のような整った顔立ち、皺や滲み一つない透き通るような肌、そんな顔を幸せそうに綻ばせている。

だがその女神のような女性。何を思ったのか、唇を尖らせて此方に向けて顔を近付けてくるではないか。

や、やめろ！何をするつもりだ！

俺は何とかその近付いてくる顔を止めようと、何故か気だるく重い腕に鞭を打ち、拒むようにと前へ突き出す。

……あれ？

しかし、次の瞬間自分の視界に写ったその手に、俺は自分の正気を疑った。

ちっさ！俺の手可愛いな、おい！

そう、視界に写ったその手は見慣れた筈の自分の手とは全く違い、某紅葉饅頭のようにぷつくらとした柔らかそうなちっちゃな手だったのだ。

所謂赤ちゃんの手だ。

そしてそんな可愛くちっちゃなその手で近付いてくる顔の接近を止められるわけもなく――……

ぶちゅうううう……

抗う事も出来ずに全く知らない見ず知らずの女性に、吸い取られるように強引に唇を奪われてしまうのだった。

よし、一旦気持ちを切り替えてこついう時は、動かず、慌てず、落ち着いて周りを確認し情報を整理する事が先決だ。

まずは耳をすまして目の前で会話する男女の話を盗み聞きし情報を集めてみる事に。

「よく頑張ったな、オマエ…。念願の『俺達の子』だ」

「ふふふつ、私達も漸く子宝に恵まれたのね…。それも男の子…、私達の願いが神様に通じたのかしらね…」

「これで私の代で『月影一族』の血筋を絶やす事にならずにすんだ…、本当によくやった」

…ちよつと待て…、ちよつと待てよ…。

『俺達の子』…

これが意味する事は一つしかない…。

認めたくはない、認めたくはないが…。

…どうやら俺はこの男女の子『月影一族』として生まれたばかりという事のようにだ…

って何でやねん！！うおーっ！どういう事だこのやろっ！転生か！？  
？転生したとでもいうのか！？説明を要求するっ！

ジタバタジタバタッ！

「あらあら、私達が二人だけで会話してたから寂しかったのかしら？ そんなに暴れなくても貴方の存在を忘れたりしませんからね、ふふふつ。さつ貴方、早くこの子に名前をつけてあげて？」

「おお、そうだったな…、うゝむ…ん」――…

「まあ！格好良くて素敵な名前ね、アナタ！レイちゃん、私達の大  
きな子！お願いだから元気で健康に育ってねっ！んゝ…ぶちゅうう  
うううううううううううううううううううううう…」

うおっ、またか！……

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

つてちよつ、長い長い長い長い長い！息が続かな……あつ——……

興奮してる様子の母に二度目の唇を奪われ、呼吸が出来なかった俺は酸欠になりそのまま意識を手放した。

氣絶して間もなく、白目を向いてグッタリした俺に漸く気づいた父が慌てて母を止め、ギリギリの所で息を吹き返したという。

転生して直ぐにまた輪廻の輪に逆戻りとか勘弁して欲しいものである。

まあとりあえず、俺はこうして『月影レイ』として新しく生を受けたのだった。

## 【二話】転生二日目

皆さん、おはようございます。

『月影レイ』です。

先日は酷い目にありました。

いきなり母親に殺されかけるとは思いませんでしたよ、マジで。

まあ、そのお陰で少しは母親が自重してくれてるみたいで、あそこまで酷い熱い接吻をされることもなくなっただけですが…

って、あーっ、うざい！髪の毛垂らすなっ！しっしっ！このっこのっ！

今現在、目の前に揺れる銀色のサラサラした髪の毛を一生懸命、手で払ってるわけですが…

それを何を思ったのか目の前の母親は、俺が喜んでじゃれついてると思って、満面の笑みを浮かべて髪の毛を垂らしてくるわけですよ。

チラチラしやがって！掴んで引っこ抜いてやるつか！このやるつ！  
てやつ！

しかし、赤ん坊の体では思うように満足に手を動かす事も出来ずに  
…

「ふふふつ、一生懸命手で追っちゃって…我が子ながら凄く可愛い  
わ…うふふふつ、ほれほれっ」

くっ！こうやって舐められてしまってるわけですよ…。いずれ捕ま  
えてやるからな、覚えているよ…。

暫く髪の毛と死闘を繰り広げていたが、そろそろ腕が疲れてきたの  
で、敗北を甘んじて受け今日の所は手を下ろすことに…。

決して負けた訳ではない、これは戦略的撤退なのだ…。

そうして手を下ろす時、何故か母親が凄く寂しそうな顔をしていた  
ので、少し胸がスツとした俺だった。

運命の時間がやってきてしまった。

今の俺では決して逃れる事が出来ない……生きる上では必要な事……、それは――

「はい、レイちゃん、オッパイの時間でちゅよっ。ママのオッパイを飲みまちょうねっ。」

iiiiiiiiiiiiiiやあああああああーっ！……！！

ジタバタジタバタ…

決死の反抗も虚しく、すんなり母親に抱え上げられた俺は、有無を言わず頭と首を固定された。

身動きとれない状況、そして目の前に迫りくる豊満な胸、真っ直ぐに近付けられる薄桃色の突起物…

くっ！心は頑なに拒んでいても、体が勝手に反応してしまう…！

真っ白な玉のような肌の双子山を小さな両手で各々鷺掴みにし、まるで吸い込まれるかのように綺麗な色をした魅惑の突起物を、本能の赴くままに加え込んだ。

「あんっ…んん……そんながつつかなくても誰もとったりしませんからね。ゆっくり飲むんでちゅよっ」

くっ、これはほ乳瓶だ…、これは牛乳だ…。俺は決してそういう趣味を持っているわけではない…っ！

こうして俺は、あまりの羞恥に心の中で血の涙を流しながら、生きていく為に必要な作業に没頭するのだった…。

「…あんっ」

こ、こら！感じるな、母上よっ！

運命とは時に残酷なものだ。

人の努力を踏みにじり、冷酷にもその現実を突きつけてくる。

抗う術を持たない赤ん坊の体の俺に、この現実には特に受け入れがたいものであった。

「あらあら、レイちゃんクチャイでちゅね。お漏らししちゃったのかな？どれどれ？」

ゆっくり近付いてくる悪魔の手。

いいいいいいいいいやあああああああああああ  
っ！！！！

ジタバタジタバタっ

顔すら動かす事ができない俺は、勿論その手から逃れる事もできず

――…

「はい、おっぶんっ。……うわ、大盛でちゅね。直ぐに取り替えまちゅからね、先ずは拭き拭きしまちようね」

抵抗虚しく掴まれた足、抵抗する間もなく解かれたオムツには、既に大盛力レーが注文されていた…。

ああ……、こんな無理やり赤ちゃんプレイを強制させられるなんて…。しかもバッチリ穴と小さな息子まで見られてしまうとは…。

もうお嫁にいけない…。

俺はまたもや心の中で血の涙を流しながら、残酷な運命を呪うのだ  
った。

### 【三話】転生半年目

転生して半年…。

今では首もちゃんと座り、漸く寝返りまでできるようになりました。

ハイハイまでもう一歩という所。

そして成長したのはそれだけではない。

あれから母上との死闘もかなりの回数を重ね、弄ばれていた俺も今では母上を手玉にとれるまで成長していた。

ユラユラ…ユラユラ…

おっと…噂をすれば鴨が…。今日の俺は一味違つ。積年の恨みを晴らさせてもらつぞ。

「ほれほれっ、レイちゃん。ママと遊びましょっつ。」

ユラユラ…ユラユラ…

目の前で揺れる銀色の綺麗な髪…。  
満面の笑顔で垂らしてくる母上。

だが、今は食いつかない。興味がない振りをし、そっぽを向く。

……

「あれれ？もう飽きちゃったのかな？うう、ママは寂しいぞ」  
…」

寂しそうな表情を浮かべながら動きを止める母上。

馬鹿めっ、とうとう隙を見せたな！この時を待っていたんだ！

俺は素早く上を向き目標を定めると、両の手の己のもてる最大速度で掴みかかる…！

——ガシッ！

…手のひらに確かな手応え。

突然の事に驚く母上を後目に、素早く両手を動かしていく。

ぐっぐぐぐぐぐつ！

必殺――…

髪の毛三重かた結び（キリッ

一瞬の出来事。我を取り戻した母上だが時すでに遅し。

「あああああーっ！！？レイちゃあゝっん？！？…なっ…！！…これっ解けないよあゝっ」

部屋中に木霊する母上の悲痛の叫び。

しっかりと三重に結ばれた母上の髪の毛は解けるわけはなく……

結局、母上は涙ながらに結ばれた髪の毛先を切り落としていた。

……にやり

……

「もおっつ、こんな悪戯したら、メツでしょっ?？」

頬を膨らませながら人差し指を立て、怒ってるぞポーズで叱ってくる母上。赤ん坊相手に何を言っているのやら…。

まあ、目の前で怒らせておくのもアレなので…そんな時には、これ。

「キャツキャツ」

満面の笑顔を向けてやる。

「あ〜ん！レイちゃん、か・わ・い・い〜っ！ママ、怒っちゃってゴメンね〜！ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ——……」

そしてそんな俺を見た途端この反応だ。

綺麗な顔をこれでもかと弛ませ、幸せ一杯の笑顔でキスの雨を降らせてくる。

へっ、チヨロいもんだぜ母上なんてよ。

まさか自分の赤ん坊がこんな事考えてるとは思ってもいないだろう。

「……………んっ……………んん……………あっ……………」

部屋中に静かに響く母上の喘ぎ声。

別に父上と夜のお勤めをしているというわけではない。

今現在は俺のご飯の時間、通称オツパイタイムだ。

あれから何十何百という回数の羞恥プレイを重ねてきた俺は……

もう何だか完全に吹っ切れていた。

俺は赤ん坊だ、文句はあるか？

と言わんばかりにその権利を主張し、そしてやりたい放題していた。  
加えた突起物を甘噛みしてみたり、舌先で押し潰すように転がしてみたり……

はたや手の平に掴んだ双子山を揉みしだいたり、その天辺の突起物を挟んで抓ったり引っ張ってみたりと……

そんなやりたい放題やってる俺の行動に、何の疑うこともせず抵抗もせず、毎回敏感に反応してくれる綺麗で美人の母親の反応を楽しんでいた。

まさに外道。

まさに鬼畜。

それが……どうした（キリッ

この時まだ、レイ生後6ヶ月である。

## 【四話】レイ一歳

どうも、一歳になったレイです。

漸くハイハイをマスターしました。

最近はおもちゃで遊ぶようになったので、歩くのももう少しといった所。

まだ家から出た事はないけど、早く歩けるようになって歩きたいなあ〜と。

ま、話は変わりましたが、俺は作戦行動の真っ最中なわけですよ。

目標は目の前三メートル程の位置で、大の字になって寝ている父上…。

昨晩は俺が寝たふりをしている事を良いことに、真横で母上とギシギシアンアン励まれてたわけなんです。

今朝方まで励んでたせいで、今はこうして疲れて眠っているわけですが……

お陰様でこっちは寝不足なわけですよ。

だからもつこれは、やるしかないと…。

作戦名はズバリ——…

『チンコ モゲロ』

大股開きで寝ている隙に股の間に生えているキノコを採取しちゃおうって作戦です。

これで世界は平和になる。

善は急げ、目標が起きる前に作戦開始です。

股の間に真っ直ぐに狙いを定め、十分な距離をとり…

いざっ、目標を駆逐する（キリッ

ハイハイハイハイハイッ——…

両の手足を高速で動かし、数瞬の内にトップギアへ。

ありったけの勢いをつけ、目標に対し顎を引き頭を向けて——…

死にさらせっ！！！！

頭にくるであろう柔らかな物体に対する衝撃に備え、目を瞑る。

……

つて…あれ？

だがしかし、目標ポイントを通り過ぎても、何かを潰す感触がくることはなかった。

何故に…、そう思い目を開け、振り向いた先には…

小さな刃物を構え、キョロキョロと辺りを見回す父上の姿がそこにあった。

「あれ……、確かに先程私に対する尋常じゃない殺気を感じたのだが……」

と、一人首を傾げてゴチル父上。

あゝ、その殺気、間違い無く俺です、父上。

しかし、あれだけ爆睡していて殺気に気付いて起きるなんて、何者なんだ父上は。ただものではないな…。

こうして俺の初めての作戦行動は失敗に終わったわけだが、だが決して諦めたわけではない。

いずれ絶対にモいでやる…。

そう密かに決意を胸に。

未だ辺りを警戒している父上をよそに、俺は静かに母上の胸の中で眠りにつくのだった。

「レイちゃん？はいっ、あゝゝんっ」

プイッ

「こらっ、食べなさー！おつきくなれないぞー？」

だが断る。

今現在、母上と父上と俺の三人で食卓という名のちゃぶ台を囲んでいるわけだが。

目の前に突き付けられたスプーン。

まあそこは問題ない、問題なのは、その上に轟然と聳える緑色のゲル状物体、所謂離乳食だ。

ゴゴゴゴゴゴゴッ……

だがしかし、ただの離乳食の箸がこの存在感、この威圧感…。

初めてコレを口にさせられた時は、転生して二度目の死に直面したものだ。

あの時は赤いゲル状物体だったのだが、俺はそんな事気にもせず、ニコニコと微笑みながらスプーンを差し出してくる母上を受け入れたわけだ。

想像して欲しい、普通ゲル状の物を口に入れた時、どんな食感がするかを。

勿論俺はツルンやプルンという食感を想像し期待し、口に招き入れたわけだ。

だが俺は甘かった。

口に入れた瞬間そのゲル状物体の野郎、あろうことか口の中で弾け飛びやがったのだ。パーーン!!!!と。

そして俺は口の中から煙を吐きながら白目を向いて意識を手放したわけなんだが…

どうやって息を吹き替えたのかは覚えていない。

そんなこんながあつたわけだから、母上が作った離乳食らしき物体は信用してはいけないのだ。

だからこの緑色のゲル状物体も、確実に何かあるとみて間違いない…

しかし、いずれは絶対に口にしないといけない…、食事をとらないと死んでしまうからだ。

目前に突き付けられたその物体…、見てるだけで冷や汗と脂汗が吹

き出てくる。

食べないとダメだよなあ…

期待した眼差しで、ツイツイとスプーンを動かし食べると推測してくる母上。

真剣な面持ちで固唾をのみ、俺は関係ないからな、と見守っている父上。

………

食卓に静寂が訪れる。

よ、…よし、覚悟は決めた。

俺は目を瞑り、そのゲル状物体を受け入れる為小さな口をゆっくりと開いた。

瞬間、母上の目が光り、ねじ込まれるスプーン。

ジュウウウウウウ…

つて、ぶううううっ!!

途端に何か焼け付くような音と共に、未知の痛みと刺激が口内を蹂躪する。

俺は思わず吹き出してしまった。

父上の顔に…。

すまん、故意だ。

「目が……ッ！目があああッ！！！」

「きゃああああっ！？レイちゃんッ！？アナタ！！！」

父上の叫び声が聞こえる。

母上の悲鳴も聞こえる。

だがそれ以上の情報は頭に入っていない。

何故なら俺も既に限界だから…。

ざまーみろ…そんな事を思いつつ、俺は口から煙を吹き出しながら意識は闇へと落ちていくのだった。

## 【五話】レイ一歳半

こんにちわ、転生して一歳と半年が経ったレイです。

漸く自分の足で立ち、歩く事が出来るようになった今日この頃。

最近は好奇心と言う名の本能が赴くままにあちこち歩き回っております。

そして現在、両親の目を盗んで初めて家の外へと脱獄を計ったわけですが。

周りをグルツと見渡し、あまりの光景に啞然としてしまいました。

なんと今住んでる家があるこの場所……周りにはこじんまりとした木造の家が数件しか建っていないんです。

しかも、集落の周りを360度完全に取り囲んでいる高層ビル並みの高さの断崖絶壁とその内側には鬱蒼と生い茂るジャングル。近くに川の流れる音も聞こえます。

どうやら此処は月影一族っただけが隠れ住んでる秘境みたいです。

何故こんなコンビ二もないど田舎に隠れ住んでるかは知らないけど、まあ静かでいい所っぽいので俺は別に気にしない事にした。

「ああー！やっと見つけたーっ！勝手にお外に出たらメツでしょうがー！まだレイちゃんにお外は早過ぎます！お外は二十歳になつてから、ね？」

おっと、看守に見つかってしまった。プリプリしながら駆け足で近寄ってくる。

脱獄はここまでのようだな。

しかし、母上よ。お外は二十歳からって、流石に過保護過ぎるだろ…。

そう思いながらも、ふてくされた表情の俺は抵抗することもなく、母上という名の看守に抱き抱えあげられ、家という名の独房に連れ帰らされるのであった。

あれから何度も脱獄を計り看守を困らせてるわけですが、今日はな

んと看守自ら外に出る許可をくれました。

俺の頑張りのかいもあり、どうやら諦めてくれたようです。

しかし、看守はそんなに甘くはなかった。

外に出る時は絶対一人監視をつけなければいけないと。

そして今現在、監視役の父上が俺の真後ろに追従してるわけなんです。

はあ……まだ歩き始めて間もない俺では、いくらオッサンとはいえ大の大人を振り切れるわけもなく、常に見張られた状態でトコトコヨチヨチと集落を見回ってるわけです。

ちっ……これじゃ何もできやしない。

ま後ろをニコニコ顔でストーキングしてくるオッサンに嫌気がさした俺は、遂に作戦コードブラボーを発動する事を決意した。

ふと立ち止まり、後ろに振り返る。

俺の行動に首を傾げる父上に対し、俺は満面の笑みを浮かべ両手を広げ、あることを推測をするポーズをとった。

そう、抱っこだ。

俺の意図を理解した父上は、嬉しそうに顔を綻ばせ両の膝を地面に付き腰を落とすと手を広げてくる。

ふふふ、作戦は順調にアルファ段階を終え、そのままベータへと移行する。

俺はヨチヨチゆっくりと父上に近付き、手が触れるもう少しという所である呪文を発した。

「ぱあ…ぱっ？」

そう、父上に対し発する初めての単語という言葉、しかも『パパ』だ。

流石にこの言葉に驚いた父上は、あまりの嬉しい出来事に我を忘れ、その言葉を噛み締めるように天国へと昇天していた。

ふっ、馬鹿め！ベータ段階は成った！速やかにガンマへと移行する！

伸ばされた父上の手をかいくぐるように腰を降ろした俺は、未だ惚けて無防備な父上の更に懐へと潜り込む。

渾身の力を込め地面を蹴り、そのまま体に捻りを加えながら、弾丸の如き勢いで父上の股の間…男の勲章へと頭を叩き込んだ。

『レイ式弾丸ヘッドライナーッ!!』

ドチャッ——…

「へうつ……」

何かが潰れる音と共に、みっともない声を漏らしながら、静かに崩れさる父上。

——ニヤリ…

これをもって作戦コードブラボーを完遂とする。

ブラボー!!

両手で股間を抑え、微動だにしくなつた父上に一瞥をくれると俺はそのまま何事もなかったかのようにその場を去つ——…

「こらあ！レイちゃん！！パパを置いてどこに行く気だあ？ちやんと大人しくしてないとダメでしょうが！！」

そんな声を張り上げ、家の角から出てくる看守の姿を視界に捉える。

ちっ…、二重尾行だったのか！

すぐに逃走を計るが、呆気なく抱え上げられてしまった俺。

不服そうな顔を浮かべた俺を抱きながら、そのまま看守は有無をいわず牢獄へと俺を連れ帰るのだった。

気絶して白目を向いてる父上をその場に残して。

## 【六話】レイ二歳：前編

二歳になり漸く拙いながらも会話ができるようになった俺。

そしてそんな俺の言葉一つ一つに馬鹿のように反応し、狂喜乱舞する両親。

この夜も父上が作った晩御飯を三人で囲み、和気藹々と食事をし。

何事もない平穏な暮らしを、娯楽も何もない生活を、俺達は本当に幸せだと感じ噛み締めて過ごしていた。

そしてこの日もこのまま夜は更け、何事もなかったかのようにまた次の朝がくるのだと思っていた。

いつもはもの静かな月影の里の夜。

里みんなが眠りにつこうというその時間に、この里の平穏をぶち壊すこの事件は起きたのだ。

キヤアアア——ッ！！！！

静寂を切り裂くかのように辺りに響き渡る悲鳴。

それに呼応するかのようにあちこちから沢山の悲鳴が沸き起こる。

父上はすぐに飛び起き、枕元に手を忍ばせ短刀を手にする、母上も俺を守るように覆い被さり抱き寄せてきた。

「オマエ達はここに残れ！何があっても出てくるんじゃないぞ！！」

そう言い残し、風のように外へ駆け出して行く父上。

「大丈夫…。パパはとっても強いから、だから大丈夫…。大丈夫…」

俺に言い聞かせるわけではなく、まるで自分にそう言い聞かせているように小さく呟く母上。

弱々しく俺を抱き寄せている母上の細い体は、小さく震えていた。

家の中の隅っこで母上と二人、父上が帰ってくるのを息を殺してまっていた。

五分が過ぎ、十分が過ぎ……。もはやどれだけ時間が過ぎたかもわからなくなつた頃。

ふと、辺りに起こっていた悲鳴が全く聞こえなくなつた。

一体外で何が起きてるんだ？

父上は何で帰ってこない？

言い知れぬ不安を感じた俺は母上の腕を振りほどき、外へと繋がる玄関へと駆け出した。

後ろから母上が何かを言っているのを感じる。だけど俺はそれを認識することができないくらい動揺していた。

目前に広がってる光景が信用出来ず、ただ玄関を出た所で何を考えるでもなしに立ち尽くしていた。

燃える家に、燃える森。

地面に転がる無数の人の影。

そして――…

右手で短刀を構えた父上が、誰か知らない人影と相對している光景が目前に広がっていた。

何をしてい――ッ！！？

「父上ッ！！」

俺は思わず叫んでしまっていた。

何故なら自分の父親の左腕が…無かったのだから。

「ッ！！？レイツ！馬鹿者がッ！何故家から出てきた！！」

次の瞬間、俺の声に反応した父上がいつのまにか俺の前に立っていた。

その顔は依然として目の前の男を定めているが、俺に対して放たれた怒声は、普段の父上からは想像もできない程動揺していた。

「あら…、まだ生き残りがいたのね。アナタの息子さんかしら？…  
…ふ…ん…なかなか面白そうな子ね、気に入ったわ。生きたまま  
連れ帰る事にしましょう、フフ…」

その言葉を聞いただけで背筋が凍りつき身動きがとれなくなった。

冷や汗が吹き出し、息が出来なくなる。

この男の存在だけで場が支配されていた。

その男は構える事もせず、ゆっくりとこちらに近付いてくる。

そして、その男が少し開けた場所に足を踏み入れた時、ふと月光に照らされ今までは暗くて判別出来なかったその男の顔が明らかになった。

肩にかかる程の黒髪に、真っ白な肌。そして何より蛇を思わせるような鋭く冷たい瞳が、俺の脳裏にある人物を思い出させていた。

—— 大蛇丸（オロチマル）…

そっだ、漫画の中に出てきたキャラクター、空想上の人物。

な、なんで…？あの瞳にあのメイク、それにあの格好…。俺の頭の中の人物と完全に一致する…。

コスプレ…？いや、この雰囲気だ、流石に有り得ない…。

五感がヒシヒシと伝えてくる。

奴は…、大蛇丸は間違いなく本物である…と。

【六話】レイニ歳：中編

「息子には指一本たりとも触れせんッ!!」

その言葉と同時に突如目前から消える父上。

次に俺の視線が捉えたのは大蛇丸を囲むように詰め寄る三人の父上の姿だった。

『木の葉流 三日月の舞』

三人の父上が大蛇丸に対し三方向から同時に短刀で斬りかかる。

「ほう、やりますね…しかし、その程度の技如きで私を倒そうなど  
——ッ! なッ! ?」

余裕の様子で回避行動に移る大蛇丸に、三人の父上は同時に短刀を振り下ろした。

——ザシユッ

確かに避けていた筈の大蛇丸、短刀は届いて居なかった。

しかし三日月型の三筋の剣閃は確かに大蛇丸の体を捉え、辺りに血飛沫を舞わせていた。

しかし父上は一瞬顔をしかめると、そのまま追い討ちをすることなくバックステップで俺の目前まで下がり今一度短刀を構え直した。

「くっ…少々油断していました…。その短刀…チャクラ刀でしたか…。しかし、ただの外傷では私を倒す事はできませんよ…」

そう言うやいなや、大蛇丸の口から両の手が飛び出すと、そのままヌルヌルと脱皮をするかのように口の中から先程の傷跡がない真新しい大蛇丸が姿を表した。

「くっ…化け物め…」

その様子を唇を噛み締めながら、ただ見詰める事しか出来ない父上。何故ならその左腕の切り口から流れ出る大量の血が体力を奪い、父上はもはや構える事もままならない程の状態に陥っていたのだ。

「フフ…、攻撃した貴方の方が満身創痍ではないですか…。どうや

ら、先程の一撃が最後の賭だったみたいですね…。それじゃ、遊びはそろそろ終わりにしましょうか…」

大蛇丸はそう言うと、父上に向けてゆっくりと左手を突き出す。

『潜影多蛇手』

するとその手から生えるように無数の白い蛇が次々と父上に向かって延びていった。

懸命に避ける父上、しかし先程までのようなスピードが出せてない父上は、その蛇に首、右手、両足を呆気なく巻きとられ捕まってしまう。

そして左手を突き出し父上を空中で拘束したまま、ゆっくりと父上に近付いていく大蛇丸。

「月影一族…、開眼していないとはいえ流石でしたよ…。そんな貴方に敬意を表し、トドメはこの草薙の剣の一振りで楽にこなさせてあげましょう…」

大蛇丸が口を開くと中から蛇が顔を出し、更にその口から蛇の体液に怪しく光る刀が柄を覗かせる。

大蛇丸はその刀を右手でゆっくりと引き抜くと、光悦な表情を浮かべ舐めるように父上を見詰める。

父上は抜け出そうと必死にもがいてはいるが、しっかりと巻き付いている蛇から逃れる体力など残ってはいなかった。

このままじゃ父上が殺されてしまう…。

でも俺の体が動いてくれない…。

いや、動いたとしても力を持たない俺にはどうする事もできない…。

だって相手は、あの大蛇丸なんだ…。

どうやったって適いつこなんかない…。

そうやって俺が全てを諦め、迫り来る現実から目を背けようと自分に言い聞かせるように言い訳を繰り返しているとき、後方から震えるか細い声があがった。

「や、やめな、さいッ！わ、わたしが、私が相手、でしゅッ、ですっ！」

俺が振り返るとそこには、包丁を両手で持ち、生まれたての小鹿のように内股でガクガクブルブルと震えている母上の姿がそこにあった。

そんな震える体でどう戦うつもりだ、と見てみると、その視線に気付いたのか母上はこちらに顔を向け…

「レイ、ちゃんも…ママが、ぜったい、守って、あげるから、ね…。」

そう言っただけは依然震えているのに、確かに強い意志の籠もった目で見つめ返してくるのだ。

こんな弱くか細い母上でも立ち向かおうとしているのに…。

俺は…俺は、何をやっているんだ？

俺はこのままでいいのか？

抗う事もせずに、このまま黙って父上を殺されてもいいのか？

「まだ居たのですか…、貴方の奥さんといった所ですかね…。フフ…まあいい。奥さんと息子さんが見守ってる中で楽しんであげます…。なに、心配する事はありませんよ…。二人とも私が責任を持つて連れ帰り、面倒をみてあげますからね…。フフフ…」

いいわけないだろ！

ここで何もしないのは男じゃない！

この世に神がいるのなら聞いてくれ！

転生した俺に意味があるのなら示してくれ！

力を！家族を守るだけの力を俺に！！

「うああああああああああ あ あ あ あ あ あ  
あ あ あ ツ！ー！やめろおおおおおおおお  
お！ー！ー！ー」

俺は心の奥底から叫んだ。

まだ生まれてから二年しか経っていない。

しかしそれでも目の前にいる彼は、確かに自分の父親なのだ。

だから守りたかった、救いたかった、無くしたくなかった。

欲しかった、ずっと欲しかった念願の家族だったのだ。

だから、もう俺から家族をとらないでくれ。

——ザシュ…ズブ…

この時自分が何をしたのは覚えていない。

しかし、自分が何かをしたという実感はあった。

肉を貫いた音と共に展開する目前の光景、確かにそれを起こしたのが自分だと——。

大蛇丸は確かに父上の心臓の位置を刀で貫いている。

しかし、父上の背中からその刀の切っ先が突き出る事はなかった。

消えた刀の切っ先は、何故か刀を刺している側の大蛇丸の胸から突き出していたのだ。

その場にいた誰もが、それを起こした筈の自分でさえその異常な光景を理解できずにただ呆然としていた。

「な、何故…私の胸から…ゴフツ…ま、まさか…」

そう言い、大蛇丸は俺のほうに顔だけを向け、納得したような顔をすると共に、口角を吊り上げ心底嬉しそうに笑い出した。

「フフフフフ…これはいい…！その右の瞳の紋様…！伝承の中だけの存在かと思っていましたよ！よもや、覚醒した月影一族を手に入れる機会が訪れるとは…！私は実に幸運ですねえ…。本当に最高の気分です…！そうだ…息子さんに免じて貴方達夫婦は見逃してあげましょう…。しかし、息子さんだけは頂いていきますがねえ…！フフフフフ…」

そう言うとズブズブと刀を抜き、最早興味は失せたと言わんばかりに父上を放り出した大蛇丸は、俺のほうへと嬉しそうな表情を浮かべながら近付いてくる。

「に、にげる…レイい…、にげて、くれえ…」

「こ、こない、でえ！私の、私の、レイちゃんです！あ、アナタなんか、くれて、くれてやるもんですかっ！」

だ、だめだ…完全に俺一人を捉えた大蛇丸の瞳、殺気、プレッシャ

「、その全てが俺に動くことも、息をする事さえも許してはくれない…。」

俺は捕まる、絶対的な核心。

まあいいや、父上も母上も生かして貰えるのなら、俺は、それ以上何も――…

「諦めるのは早いぞ、ボウズ。ワシが来たからにはもう安心だ。」

その言葉と共に、大蛇丸の目の前にその行く手を阻むかのように幾本もの鋭い針が音を立てて突き刺さった。

【六話】レイニ歳：後編

「やっと見つけたぞお、大蛇丸。そろそろ鬼ごっこも終わりにして大人しくやられてくれんか、のオ？」

ボンツと音を立て、煙と共に目前に現れた男。

腰下まである長い銀髪に赤と白のこの服装、油と書かれた額当てに目の下の特徴的な歌舞伎のようなメイク。

間違いない、この人は大蛇丸と同じ木の葉の三忍の一人――

通称ガマ仙人こと、自来也（ジライヤ）だ。

「またアナタ…。いい加減私を追うの、やめてほしいのだけど…自来也。今、最高に忙しくてね…。用があるなら後にしてくれないかしら…?」

大蛇丸から先程までの笑みが消える。流石の大蛇丸でも同じ三忍の自来也の登場は歓迎できないようだ。

「なあに、手間はとらせんよ。お前が黙って殺されてくれればのオ。」

大蛇丸、自来也の二人の間に殺気が渦巻く。空間を覆い尽くし、歪めかねない程の二人の殺気。場を静寂が支配し、ゆっくりと時間だけが過ぎていく。

「…フツ……今日の所は、諦めるしかないようね…。流石の私も手負いでアナタの相手をしようとは思わないわ…。レイくん、月影レイくん…名前、覚えてたわよ…。いずれ絶対に迎えに行くから、それまでその体、鍛えておくように…フフフフフ…」

大蛇丸はそう言い残すと、ズブズブと地面の中へと溶け込んでいく。そしてその体が完全に地中に消えた時、場を支配していた気配が嘘のように消え去り、本当にこの場から大蛇丸は居なくなったのだと感じた。

「最悪の事態だけはまぬがれたようじゃのオ…。さて、まずは…」

——『口寄せの術』

ドロンという音と共に煙が巻き起こり、そこから白い白衣のような

物をきた小さな斑色の蝦蟇蛙が姿を表す。

「ガマブチさん、急に呼び出してすまんのオ。あそこに倒れてる男性を死なんよう、応急処置してあげてくれんか、のオ？」

「なんや、めんどいのう。まあ、自来也坊の頼みじゃ聞かんわけにはいかんか」

ガマブチさんと呼ばれた蛙はそう言つと、ピョンピョンと父上の所まで跳ねていく。

そこで父上の存在を思い出した俺も、極度の緊張で固くなった体を無理やり動かし父上の元へと駆け出した。

それに続くように母上もパタパタと走ってくるのが分かった。

「ち、父上っ！しっかり、して！死んだら、許さないっ！」

父上の横に膝を付き、顔を覗き込む。母上も遅れてやってくると、父上の上半身を持ち上げて自身の太腿に頭を乗せる。

「あ、アナタっ！私の許可なしに死んだりなんかしたら、絶交してやるんだからね！絶対口も聞いてあげないんだからっ！」

涙ながらに父上に声を掛ける母上、少々内容がズレているのは「愛嬌」だろう。

「そ、それは…困った…。それじゃ、死んでも…死にきれんな…。」

何とか返事を返してくる父上だが、意識はあれど目の焦点があつておらず呼吸も不自然な事からギリギリな状態なのが手に取るように分かる。

ふと、先程から父上の隣で忙しなく診察らしき事をしていた蛙が、父上の無くなった左手の付け根目掛けて、何かドロドロした液体を口から吹き出し塗り付けた。

「ナニコレ！汚っ！こんなんで本当に大丈夫かよ！」と、思っていると後ろからゆっくり歩いてきた自来也が俺の考えを読んだのかその液体の説明をしてくれた。

なにやら妙木山きつてのガマ医であるガマブチさんが体内で精製している秘伝の蝦蟇油らしい。

外気との遮断や止血、殺菌、消毒などの他に細胞の活性化を促し自然治癒力を倍増してくれるのだとか。

ガマブチさんは父上の全ての傷にその油を吹きかけ終わると、自来也と何やら二、三会話し、着たときと同じように煙と共に帰ってい

った。

これで父上は一安心らしい。

今は気を失い、安らかな寝息を立てて眠る父上、体中が油でデロデロ又メ又メなのでキモいし触りたくない。

このまま放置で。

取り敢えず先ずは、父上や自分達を救ってくれた自来也に対し、母上と二人で涙ながらに誠心誠意お礼を言った。

そして自来也が里のみんなの亡骸を集めてきてくれ、俺も穴を掘るのを手伝いみんなを土葬し、簡単な墓を作った。

今は簡素な墓だけど、いずれきちんと供養して、立派な墓を立ててあげたいと思う。

ふう…今日は色々と疲れた。まだ幼い俺の体には酷ってものだ。こんな時は早々に休むに限る。

放置していた又メデロの父上に出来るだけ触れないように三人で家に運び込み、俺と母上も寝る事にした。

勿論父上とは違う布団で。

自来也も他の家を借りて休日の所は泊まるそうだ。

明日大事な話があるらしい。

気にはなるが、寝ることが先決だ。

もうすぐ日が昇ってくるが関係ない、体が望むだけ寝よう…。

おやすみ、母上。

ついでに、父上。

それと、自来也。

## 【六話】 自来也外伝

「ちつ、また一步出遅れたか。見事にもぬけの空だのオ…。」

ある洞窟の最奥、何かの施設があつた痕跡があるこの場所。

ワシが長年追いつけている大蛇丸の根城だつた研究施設跡だ。

大蛇丸が里を抜け抜け忍となると、ワシは後を追うように旅に出た。

だがあれから何度か根城を突き止めるも決着をつける事叶わず、こ  
うやっていたちごっこを繰り返しているというわけだ。

そして今回も逃げられてしまった。これで一からまた情報を集めな  
おさなければいけない。

だからワシは何か手掛かりが残ってないかと、この施設跡地を隈無  
く詮索した。

ふと机と壁との隙間に一枚の紙切れが落ちている事に気付いた。ワ  
シはそれを拾うと早速その場で読み始める。

すると飛んでもない事実がそこには記されていた。

月影一族の末裔が隠れ住む秘境を発見した…と。  
そこにはその里の在処も示されいた。

ワシはすぐさまこの場所を後にし、その場所へと急ぎ足を運ぶ。

月影一族――

ワシが昔読んだ木の葉の門外不出の文献の中に記されていた伝承の一つ。

初代当主は神仙（神に一番近い仙人）であつたとされ、不老不死であつたと云われている。

その右の眼には空間を支配する瞳術を可能とした特殊な瞳を有し、更には五行『火行・水行・木行・金行・土行』を完全に使いこなしたという。

五行を従えし月の者。

それが月影一族だと。

しかし、その瞳術も五行も初代当主のみしか使えずに、一族は滅んだと記されていた。

まさかその末裔が生き残っているとはのお…。

何せよ不老不死を目的とする大蛇丸の事だ、人体実験の材料としてこの里を襲撃するはずだ。

だからこそ、手遅れになる前に急がなければならない。間に合ってくれ…。

ここがあの紙切れに記されていた場所。

確かにここを探し当てるのは容易ではないのオ。

ワシは目前にそびえ立つ断崖絶壁を前に溜め息をつき、それから気持を切り替えるとその絶壁を登り始めた。

.....

絶壁を登りきり、見下ろした眼下には既に火の海が広がっていた。

不味いのオ…。しかし、まだ火が燃え切っていないという事は、そこまで時間は経っていない筈。

そしてワシは急ぐべく、その絶壁から飛び降りた。

……

降下中、少し開けた場所にある人物の姿を確認する。

——大蛇丸！

大蛇丸が歩み寄る先、月影一族の生き残りと思しき人影もある。

間に合ったか！

ワシは牽制にと大蛇丸に対し髪の毛千本を飛ばし、瞬身の術を使い絶壁を蹴り跳躍すると、目的の場所へと急ぎ向かった。

……

現在目の前には、因縁の相手大蛇丸。  
しかもあ奴は胸に深手を負っており、そこから大量の血を流していた。

珍しいのオ…あ奴が外傷を負っているとは…、しかも何らかの理由があり、あ奴でも癒えない傷みたいだのオ…。

注意は大蛇丸に向けたまま、視線だけで周りの状況を確認してみる。

綺麗で美しくスタイル抜群な女性が一人…これは上玉、お近づきになりたいのオ。……って、いかんいかん。

そして地面に倒れ伏す、まだ微かに息がある男性が一人。見た所左手が無く、出血が酷い。これは早く治療をせんと命がないのオ。

後はまだ二歳程の幼子…、見たところ無傷みたいじゃのう。

しかしこの気配は——…！！？

このボウズの右眼…！

これは伝承にあった月影一族初代当主の瞳と同じ紋様——…

『神仙眼（しんせんがん）

よもや伝承が本当の事だとは。お伽話や神話の類だと思っていたんだがのオ。

しかしこのボウズが捕まる前に間に合ったのは何という偶然……、いや、ここまできたら運命と言っしかない。

これも巡り合わせか。

もしかしたらこのボウズが、『予言の子』かもしれんのオ…。

何はともあれ、大蛇丸には何があっても渡すわけにはいかん事は確かだ。

未だ対立する大蛇丸と睨み合いが続く。

あれから大蛇丸はあっさりと帰ってくれた。

また取り逃がしてしまったのは残念だが、今回は仕方がない。

むしろ早々に帰ってくれて、助かったという所か…。

先ずはあの死にかけの男を助けるのが先決だのオ…、話はまた明日でもいい。

………

あれから半日が立ち、何とか意識を取り戻した男とその妻、そしてその息子の三人と話す機会を設けた。

しかし、こいつらが家族だったとはのオ…、こんな美人がコブ付きでしかも一児の母だったとは。至極残念だのオ…。

つと、いかんいかん、考えが逸れてしまった。早速で悪いが話を切り出さなければ…。

「ワシは木の葉の三忍の一人、通称ガマ仙人こと自来也と申す。早速で悪いがある提案がある。このボウズ…、ワシに預けてみないかのオ？」――

大蛇丸の事や、この瞳が持つ数々の危険性と不安材料を交えこの夫婦の説得を試み、何とか理解してもらうことができた。

こうしてワシは一年の期間限定でこのボウズを預かる事になった。

何故一年かというと、こんな成長期真っ盛りの愛しの我が子と離れるなんて、一年でも長すぎる！と駄々をこねられたのだ…やれやれ、息子馬鹿夫婦だのオ。

因みにこの夫婦は一足先に木の葉の里に移り住む事になった、勿論事前にワシがガマ便でお偉い方には知らせておいた。

さて、これから忙しくなりそうだのオ…。

先ずはこのボウズ…いや、レイをつれて妙木山に行き仙人としての力の使い方を覚えさせないと。

何せ伝承にあった通りなら、レイは産まれながらにして仙人だったということになる。

つまりは、ワシと違って仙人モードなど使わずして常にして仙人であるという…。

何という規格外…反則だのオ…。

まあだからこそ、仙人としての力の使い方を覚えさせ、最低限の仙法を扱えるようにさせないといけない。

更には空間を支配するという瞳術が使える眼の制御も慣れさせないと…。

たった一年で二歳の幼子がどれだけ力を扱えるようになるかはわからんが、レイ自身の将来のためにも頑張ってもらわないと…。

やれやれ、暫くは旅もお預けだのオ。

## 【六話】 自来也外伝（後書き）

ようやくここまでできました…。

ある程度は考えてた通りに話が進み、拙い文章ながらも辻褄が合うように奮闘しました。

主人公の瞳術は追々明かしていきます！

そして、五行『火行、水行、木行、金行、土行』はそれぞれの性質変化を表します。

因みに五行は『月影』の名前の由来です。

曜日にもある月、火、水、木、金、土って、五行の前に『月』があるので何とか月を使いたくてこの苗字にしました。

五行を従える者って設定もその為ですね。

木遁は少し悩んだんですが、ご都合主義の勢いで使わせる言い訳を探します。水と土も使えるから性質変化の法則には当てはまっていますね。

それと金行こと金遁も追々明らかにします！

これは火、水、土の3つを使った血継淘汰？という設定にするつもりです。

でわ、引き続き頑張りますので応援よろしくお願いします！

感想もらえるとやる気アップしちゃいますよー（笑）

【七話】ただいま、ママ

ふう、ここが木の葉隠れの里か… やつと着いた。

自来也の野郎、こんな大ざっぱな地図で送り出しやがって…。

溜め息を吐きながらチャクラ感応紙で出来た地図らしき物をクシャクシャと握りつぶし、その紙にチャクラを流しボロクズへと変える。

そして今一度目前にそびえ立つ木の葉隠れの里の入り口、『あ』と『ん』と書かれた扉を見上げる。

まあ見上げると言っても、今の俺には見えていないんだがな。

今の俺には見えない、その訳は時を遡る事数日前。妙木山を発する時の事だ――……

「レイ、この一年よく頑張ったのオ。時間が無かったから急ぎ詰め込む形になってしまったが、お前の飲み込みが早くて助かったわい。完全に力を使いこなす為にはまだまだ修行が必要だが、今のオマエなら一人でもやれるだろう。精進するんだぞ。…それじゃ、ワシはちよつと他に用があるから木の葉の里まで着いていく事が出来ん。」

だからここで暫しの別れだ。  
それとコレはワシと蝦蟇達からの餞別だ…。」

そういつて手渡されたのは、黒地の着物に濃い藍色の帯とマフラー、そして特注の鋼鉄製一本足下駄と、何やら黒く染められた包帯のような帯だった。

着物は分かる、下駄も修行の一環だろうからいい。

それじゃこの黒い帯は？とあからさまにハテナマークを浮かべて自来也を見上げると、そうなるのを分かって待ちかまえてたかのように説明してくれた。

「それは、オマエの両の目を塞ぐためのものだオ。今のオマエの両の目の縁には仙人特有の隈取りがしっかりと入っておる、それにその両の瞳を今里の者達に見せるといらぬ混乱を招く恐れがあるからのお。だからそれはまだオマエが自身を守る力がない内は他人に知られないようにせねばならん。幸い、常に仙人状態のオマエなら万物の気配を察し、眼で見ずとも生き物や物質、チャクラの流れすら感じ取る事ができる筈だのオ。だから、オマエは両の目を隠し生活をしろ、分かったかのオ？」

この俺の目の事を知っているのは、俺と両親、自来也、それと大蛇丸だけ、それ以外にはまだ知られないようにしないといけない。

それから俺は常に渡された黒染めの帯で目の周辺を覆うように隠しているのだ、だから見えてはいない。

まあ見えていないだけであって、木や鉄、そこに書かれている墨の気配や万物に宿る微弱なチャクラの陰で、どんな形でどんな大きさか、更には何が書かれているかまで手に取るように分かるのだ。

だから別に目が見えないからといって全く苦勞などはしていない。

ま、傍目からみれば両目を隠してる俺の姿は少々異様ではあるだろうが。

さてさて、回想はこれくらいにして先ずは、母上達に移り住んだ家に行くかな。

火影のおっちゃんへの挨拶は後でもいいだろう。

そうと決まればこの里の中で生活する人達の中で唯一知っているチャクラを追う。

一年振りかあ…母上やついでに父上もビックリしてくれるかなあ…。  
俺の事分からなかったり、知らないふりされたらどうしょ。

そんな期待半分、不安半分のドキドキを胸に。

俺は里の隅のほうにあるチャクラ反応に向かい、屋根から屋根へと飛び移りながら移動した。

.....

着いた。

前住んでいた家と似たようなこじんまりとした佇まいの木造平屋。

まあこんなもんだろって感じで、普通の家だ。

まあそんな事よりも今玄関口にはちょうどバケツを片手に杓子で水を蒔く母上の姿があるのだ。

まだ百メートル程離れてはいるから向こうは気付いてない。

しかしこの懐かしく優しい雰囲気を発する人型をしたチャクラの塊は間違いないく母上だ。

そんな母上を懐かしく思いながら暫し眺めていると、突如母上がこ

うちの方に顔を上げた、ガバツと。

何故俺に気付いたかは分からない、ただもう少し自然に見付けて欲しかった。

何の予備動作もなしに急にこっち向くから、逆に俺の方がビックリさせられてしまったわ。

そんな俺の心境も知らない母上はバケツと杓子をその辺に思いっ切り投げ捨てると、満面の笑みに涙を流しながらこっちに向かって走ってきた。

パタパタパタトテトテトテトテ…

……

母上超遅いっす。

百メートルを一分近くかけて走ってきた母上。

そのまま俺の小さな体にダイブするように飛びついてきた。

そんな母上をしつかり受け止め、未だ笑顔のまま泣き止まない母上の頭を撫で、背中をさすってあげる。

暫くそうしてあやし、ようやく落ち着い母上は、涙と鼻水でクシヤクシヤな顔を俺に向け、懐かしい笑顔を浮かべて呟いた。

「おかえり、レイちゃんっ」

その一言が俺の心に優しく響いた。

ああ…俺の家はここなんだ。

俺は帰ってきてよかったんだ、と。

俺は心の中でこっそり大号泣しながらも、外面はポーカーフェイスを気取り…

「ただいま、母上」

少しづつきらばうに言ってみた。

しかし十数年来の心からのこの言葉に、恥ずかしさを覚えた俺は結局はにかんでしまうのだった。

## 【八話】インペル ダウン

今現在、漸く脱獄に成功し逃走中のレイであります。

久々の母上の暖かさ…それは大いに結構だったのですが、一つ問題が起こっていました。

それは――…

会えなかった一年の月日のせいで母上の息子ラブ度にも更なる磨きがかかっており、その領域は溺愛、いや、むしろ極度の依存…ヤンデレといってもいいぐらいに昇華していたのだ。

いやぁ…愛情を注いでくれるのは嬉しいのですが、あれは…。

……

「は、母上…そろそろ離して、ください…」

「やだ…ちゅっちゅっちゅ――」

「いえ…、あの、ちょっと火影様達に挨拶に行くだけなので…」

「だあめ…ぶちゅー——」

アレから母上に抱きつかれたまま家に入った俺は、居間に入るなり後ろから抱き締められる形で足の上に座らされ、それからずっと容赦ないキスの絨毯爆撃を喰らっているのです。

しかし、流石にこのままって訳にはいかないので、離して貰えるよう交渉しているわけですが——

「ちゃんと帰ってきますので…」

「やあだ…ちゅちゅちゅちゅちゅー——」

こうして難航しているわけです。身代わりに父上をサクリファイス（生贄）しようにも、役に立たない事に今は任務で里を出ていて留守らしいのです。

現在、里は未曾有の人材不足に陥ってるらしく、いくら片腕がない父上の力でも借りたいのだとか。

幸いな事に父上は片腕がなく印を結べなくなっではいるが、体術だけでも十分中忍としてやっていけるだけの力があるらしい。

まあ無職のニートで居られるよりは、一家の大黒柱として頑張ってもらいたいものだが…

父上が任務でよく家にいない事も相俟って、寂しがり屋の母上に更に拍車を掛けているようで、俺がこうして絶賛被害にあっているというわけだ。

こうなったら、致し方ない…俺の力をフルに使ってでも脱出させてもらおう！

では早速…

『身代わりの術』

ボフンと音を立て、俺等身大サイズのキューピー人形と体を入れ替える。

そして間髪入れずに玄関へと走るが――

ガシッ…っと、黒い影を漂わせている母上に呆気なく捕まってしまった。

先ほど百メートルを一分近くかけて走ってきた人と同一人物とは思えないスペック…

しかし、俺はここで諦めるわけにはいかないのだ。

俺は咄嗟に大量のチャクラを練り込み、印を結ぶ――

『仙術　霞隠れの術』  
カスミ

仙術の一つ、水気のない場所でも空気中の水分を無理やり集め、チャクラを混ぜ込みながら高濃度の霞を展開する。

水遁霧隠れの術と違い視覚を遮るだけではなく幻術効果もあり、自分以外でこの霞を吸い込んでしまった者の方向感覚を狂わせ混乱させる術なのだ。

更に身代わりの術で俺等身大サイズのネズミーマウス人形と体を入れ替え、瞬身の術で玄関の外へと飛び出る。

ここまですれば流石に逃げ切れただろう――と、一瞬気を抜いたのがいけなかった。

ガシッと腰辺りに衝撃が走り、体に重さを感じる。

振り向けばそこには俺の腰に両手を回して体全体を引き摺る形でし

がみつき、涙で瞳を潤ませさせながらイヤイヤと顔を振る母上の姿が――。

どこの子供ですか…、三歳児相手にだだをこねるなんて…。

つか、どうやってあの霞を抜けてきやがった。

仕方ない、あまり使いたくなかった技ですが…

チャクラを練り込み印を結ぶ、そしてボフンと音を立て煙と共に現れたのは――

大量のレイだった。

『多重影分身 逆・ハーレムの術！甘えん坊一杯の巻！』

ハーレムの術を多重影分身で発動、通常の分身では触れられたら偽物だとバレ、今の母上相手では時間稼ぎにならない恐れがあるからだ。

現れた十数体にも及ぶレイの影分身達は次々に母上に甘え出す。

抱きついたり、頬刷りをしたり、頬にキスをしたり、と…。

そんな大量の息子の姿に母上は、光悦に顔を綻ばせ、幸せ一杯という表情で次々に影分身達を愛で始めた。

絶対脱獄不可能監獄島… 呆気なく陥落。

—— ふっ、チヨロいもんだぜ、母上なんて。

俺はそんな母上と生贄達に一瞥をくると、火影のオッサン達に挨拶するべく颯爽とこの場所を後にした。

しかしこの時レイはあることを忘れていたのだ。

多重影分身のメリットであり、デメリットでもある、その副作用とも呼べる術を解いた時の効果の一つを。

そして、その場から離れたレイ本人は知る由もなかったのだ。

数時間後、顔を蒸気させ満足した面持ちをした母上、その周りには

廃人の如くなるまで愛でられた十数体にも及ぶ影分身達の成れの果ての姿を。

術を解いた時、レイがどうなったのか――…

いや、これ以上は敢えて記さないでおこう、レイ自身の沽券の為に。

そして誤解を招く前に伝えておかなければいけない事も一つ。

それは…

決して事後ではない、と。

## 【九話】悪夢、再び

こちらレイ、現在火影に挨拶すべく火影邸に潜入中だ。

自来也曰わく、俺が仙人である事は極秘中の極秘。

この事は木の葉の中でも、火影の他に木の葉の相談役という爺婆二人と、暗部のお偉いさんのダンゾウというオッサンしか知らされていないという。

伝説の神仙の再来である俺の存在が明るみにでてしまえば、研究目的や将来的な脅威として他の里に狙われてしまう恐れがあるためだ。

だからこそ俺は俺の為に時がくるまで、目立たず騒がず知られずに、日々を過ごす必要がある。

と、言うわけで挨拶一つにしる極秘に済ませようという、我ながら気のきいた作戦を立てたのである。

現在俺は隠密機動用多目的運搬箱という物を使い移動中だ。

これは伝説の隠密である『蛇』と云われた忍が潜入の際によく愛用していたという代物。

一見ただのどこにでもある箱に見える、だが実はそれが狙いなのだ。これを被って移動する事により隠密性が増し、敵が近くに来た際にはその場で静止する事により自然に背景に溶け込む事ができるという。

さながら道端の石ころのように、誰からも気にされる事なくその場をやり過ごすことができるというのだ。

すんっばらしいっ！

では、早速これを被って火影のオッサンがいる部屋まで移動しよう。

ガサガサガサ――

「こんなところで何をやっておるのじゃ……」

ビクッ――何っ、早速見つかってしまったと！？ここは静止してやり過ごすんだ。

.....

「いやいや、今更止まってももう遅いと思うのじゃが…」

ちつ…、流石に動いている所を見られたら今更背景に溶け込むのは無理があるか…、それなら――…

「にゃ、にゃあゝ」

「なんじゃ、捨て猫じゃったか――…つて、そんなわけあるかい！  
…っしかし、その声はナルトではないみたいじゃのオ？」

仕方がない、これ以上はやり過ぎそうにない。と判断した俺は、隠密機動用多目的運搬箱を脱ぎ、その声の主の前に姿を現した。

「ふむ、その家紋…お主が月影夫婦の息子のレイじゃったのか…。  
よく来たのオ、里の代表として歓迎するぞ」

この人が三代目火影…。今姿を見ることはできないが全体的なチャクラ量としてはそこそこしかない。だが、やはりこの研ぎ澄まされた気配や洗練された身のこなしはただ者ではないという事か…。

歴代最強と謳われていただけはある、かな。

「歓迎されてやるよ、火影のおっちゃん。コレから世話になる」

「うむ。そうじゃ…。良かったらうちのナルトと仲良くしてあげてくれんかのオ？歳もお主の一つしたじゃから、友達になってくれたらワシも嬉しいんじゃが…」

おっちゃんの精神チャクラが微かに乱れる。本当にナルトの事を心配しているんだろう。

俺の一つ下ということはナルトは二歳、まだアカデミーにも通っていない時期だ。

九尾の襲来から二年しか経っていないということは、それだけナルトを見る周りの大人達の視線も酷い筈。

ナルトだって両親を亡くしているっていうのに…。

里の再興に奔走しなけりやいけない火影のおっちゃんじゃ、ナルトの側にずっと居てあげる事もできないだろう。

だからナルトはそんな中、いつも一人っきりで遊んで居るはずなのだ。

俺はそんな内情を知っておきながら放っておける程非情にはなれな

い。

「安心しな、おっちゃん。俺がナルトの友達になってやるよ」

俺の言葉を聞いた火影のおっちゃんの精神チャクラが穏やかになる。少しは安心してくれたんだろう。

その後おっちゃんは「何かあったらわしを頼るんじやよ。それとナルトの事宜しく頼む…」と言い残し、仕事に戻っていった。

ま、折角少しは原作知識があるんだし、原作主要キャラ達を陰ながらサポートするのも悪くはないかな、とか考えながら火影邸を後にした。

火影邸を出た頃には既に太陽が沈み掛けており、家から脱出してから三時間近くが経過していた。

そっぴや、影分身を囫にしままだったな…。そろそろ母上も満足してくれてるだろうし、解除しても問題ないだろう。

その時の俺はそんな簡単な気持ちだったのだ。

解——…

ん……あれ……ここは、どこだ……？俺はどうしたんだ……

朧気な意識が少しずつ覚醒してくる。俺はどうやら横になって寝ていたようだ。

あれ……俺は何をしていたんだっけ……

確か、火影のおっちゃんに挨拶を済ませ……それから……

ズキンッ——ツッ——

その先を思いだそうすると突如頭痛が襲ってきた。あたかもそれから先を思い出すのを妨害するかのように……

俺は頭を抑えながら上半身を起こした。

周りを見渡しチャクラを感じ取る。

殆ど何もない空間…、畳の上に布団を敷き、そこに俺が寝ている。

少し離れた所、隣の部屋に母上のチャクラを感じる。

どうやらここは俺の家のようだ。

そして俺は何らかの理由により意識を失い倒れ、ここに運び込まれたのだろう。

倒れた理由は判らないが、脳や体が拒否反応を起こすぐらいだから思い出さないほうがいいのだろう…。

「あつ、レイちゃん起きたんだ、良かった〜っ。ママ、スツゴく心配したんだからね？お医者さんが言うには極度の精神的ストレスと疲労が原因で倒れたらしいの。火影様の家の前で倒れてたみたい」

つと、俺が思考の海にダイブしている所で母上登場、パタパタと小走りで駆け寄ってくる。

って母上、顔が異様に近いっ！近付きすぎ！

「ママの愛情一杯のご飯食べて〜。ママと一緒に一杯睡眠とって〜。

後はママの愛情一杯の看病を受ければ疲れやストレスなんて吹っ飛んじゃうからっ！」

その自信はどこからくるんだ。

つてあれ…、さっきの母上の台詞、なんか色々引っかかるんだよなあ…。

まあいいか、久し振りの母上だしな。

「それじゃ早速お粥作ってくるから、大人しく待っててねっ」

そうしてまたパタパタと駆けて台所へ向かう母上。

母上の手料理が、久し振りだな。

.....

しまった…、こんな重要な事を忘れていたなんて…

暫く待った結果、目の前に用意されたのは見た目はただの変哲もないお粥だというのに…

オオオオオオ、オオオ、オオオオ、オ、オ、オオ…

この禍々しいオーラ、近くによるだけで何故か肌がチクチク刺激され、ただそこに在るだけで空間が歪んでいる。

これはきつとNASAで開発されたバイオ兵器か何かだと思う。

一つ確かに言える事は、決して食べ物とかそんな生易しいモノではないという事だ。

そんな危険物を目の前にいる悪魔は満面の笑みで、スプーンに乗せツイツイと動かし食べると推測してくるのだ。

おいおい、コイツ正気かよ…。息子で人体実験するか、普通。

ここは断固として拒否する。

しかし、そんな一向に食べる気配を見せない俺に対し、母上はいきなりポロポロと泣き出したのだ。

何という必殺技…。

流石の俺も母上の涙に動揺し、どうしていいか判らず、どう声を掛けていいか判らず口をパクパクさせながら慌てたのだ。

しかしそれが甘かった、罨だっただ。

刹那、母上の目が怪しく光り、手に持ったスプーンを俺の半開きの口へとねじ込んできた。

あれ、何てデジャビュ…

瞬間、口の中でお粥が何十倍にも膨張し、そして炸裂した。

パァ——ンッ！！

俺は口から黒い煙を吐き出しながら後方へと吹き飛んだ。

空中で錐揉み回転をしながら後方に吹き飛んだ俺は、そのまま勢いよく壁へと突き刺さったのだ。

俺は微かに残る意識の中、母上にはもう絶対何も作らせないと心に誓い、そして静かに意識を手放した。

## 【十話】新生活

おはよーございますー。

何故かここ二、三日の記憶が欠如しているっぽいレイです。

朝起きたらそこには不自然な笑みを浮かべる母上と、心底心配そうな表情を浮かべている久し振りの父上が俺の顔を覗き込んでおりました。

どうやら俺はまたもや寝込んでいたらしく、看病してくれていたみたいですよ。

ただ、俺が木の葉の里に帰って着てから三日が経っているらしく、俺にはその間の記憶が殆どないわけですよ…おかしいなあ。

取り敢えず、火影のおっさんには挨拶した事と、ナルトを頼まれた事は覚えてるんだが…ただそれ以外を思い出そうとすると原因不明の頭痛に襲われるわけなんです。

まあ、別にいいか。

そういう事で看病されてるわけですが、俺が寝込んでる間に父上は任務から帰ってきたみたいです。

久し振りに見た父上は前よりやつれていて、少し白髪と皺が増えてる気がした。

やっぱり見知らぬ土地に移り住み、今までとは全く違った生活を送り、それに……あるはずの場所に無い左腕……やはり片手じゃ色々と不便で苦勞するはずだ。

生きていく為にはやっぱりお金は必要だし、きついだろっけど父上にはもう一時の間頑張って稼いでもらうしかない。

そして俺が稼げるようになり二人を養えるまで成長した暁には、父上と母上の二人にはゆっくり隠居してもらいたい。

ま、そのためにも他国に、そして里の人達にも俺の神仙としての存在が、俺の不自然な強さがバレないようにしながら、更にこっそり地力を鍛えないといけない。

来るべき時に備えてね。

あれから父上と母上と俺の三人で食卓を囲みながら離れていた一年の間の事を話した。

特にこの目を隠してる包帯の事は心配していたらしく、目に問題はない、ただ隠す必要があるって事を説明すると二人とも本当に安堵していた。

ただこの成長期の中の俺の可愛い顔が見れないのは嫌って駄々をこねられ、たまにこっそり包帯を外して顔を見せるようにと言われた。

まあ、それぐらいならいいだろう。

お互い色々な話をし、そして夜も更けそろそろ晩御飯の支度をしなきゃと母上が腰を上げようとした時——俺の体を電気が走った。

——ドクンッ……

……止メロ……！

——ドクンッドクンッ……

奴ヲ止メロッ！

ードクンツドクンツドクンツ…

命ガ惜シケリヤ止メルンダ！

自身の体が発する謎のシグナル。

それを脳が理解するより先に、俺の体は勝手に母上を抑え込んでいた。

何故こんな事をしたかは判らない、だが何故かそれが正しい行動だったと信じて疑わない自身がいる。

なんで止めるの？私のご飯食べたくないの？と可愛く首を傾げている母上。

ふいに隣をみると、何故か父上が満面の笑顔でサムズアップしている。

そしてその目は薄ら涙を浮かべて『本当に…よくやった』と言っているような気がした。

その日から、食事当番は俺の役割になった。

父上の気合いの入った指導のもと、日々料理の腕をあげていく事になる。

俺が料理を作る事になって、母上は俺の料理が食べられるという嬉しさ半面、母親としての仕事をとられたと少し不服そうである。

だがこれで良かったんだと思う。

初めての料理で火加減とか判らず少し焦げて不格好になってしまった俺の料理を、こんなにも美味しそうにがつついて食べる父上の姿を見たら……。

そういや、これまでうちの料理を担当していたはずの父上は、片腕では危ないという理由で料理をすることを禁じられていたらしい。

俺が帰ってくるまでの一年間はずっと母上が料理を作っていたのだとか。

何となくだが、父上がこんなに老けたのも、そして長期の任務が多かった理由も分かったような気がした。

気がただけで、そう思った理由は思い出せない…。

母上の料理——ツッ！…頭痛が…。

やっぱり駄目だ、思い出せない。…これ以上は無理に思い出すのはやめたほうがいいかもしれないな。

どうせ重要な事じゃなかったんだろう。

と、俺は幸せそうに料理を頼張る父上やぶーぶー言いながらも嬉しそうに料理を口に運ぶ母上を横目に見ながら、やっとまた三人での生活が始まる事に嬉しさと安堵を覚えながら自分の分を食べ始めるのだった。

【十話】新生活（後書き）

あのお粥により、レイの母上の料理に関する記憶全般が吹っ飛んでいます。

ですが、体は覚えていたわけです。

母上には絶対料理を作らせないという小さな決意を。

## 【十一話】うずまきナルト？

な——…なんだって——っ！

俺の体を衝撃が走った。

それは俺の中で信じていたものが脆くも崩れ去った瞬間だった。

時は遡る事一時間前——…

「ここがナルトがいつも預けられてるっていう託児所兼孤児院か…」

俺は火影のおっちゃんとの約束を守るため、昼間ナルトが預けられてるという施設にきていた。

ここは、戦争や九尾襲来によって両親をなくした子供達が保護され

生活している孤児院。

そして現在未曾有の人材不足により、里の大人達の殆どが出払っており、それによって育児の出来ない家庭も少なからず出てくるため、まだ世話の必要な子供もここで一緒に預かっているのだ。

そして両親を無くしたナルトは火影のおっちゃんが預かっているといても、おっちゃんも火影なのだから昼間は忙しい。

だからナルトも昼間はいつもこの施設に預けられているのだ。

「しかし、火影のおっちゃんも思慮が足りねえなあ…」

現在ナルトは二歳である。

まだ会話もろくにできない小さいナルトを、この時期に見知らぬ大人達の中に預けるなんて少し考えればどうなるか分かるだろうに…。

俺は一人ぼやきながらその施設の中に入っていく。

どこにいるかは知らない、だが俺なら問題はない。  
俺は歩きながら施設内のチャクラを感知する。

すると大きな部屋の一角で一人孤立しているチャクラを発見、そこ

に向かうとすぐに目的の人物を発見する事ができた。

周囲から一定の距離をあけられ、一人部屋の隅っこで積み木で遊ぶ幼いナルト。

そして周囲の保育士？らしき人達はその遠巻きから隠すこともせず、に堂々と陰口を叩いていた。

『あれがああ噂の…』『化け物の子…』『あの子さえいなければ…』

里の大人達はナルトのお腹の中に『九尾の狐』がいることを知っている。

だがその知識も人伝いに聞いた噂話によるもの。

その内容は事実とは異なり、【ナルト＝九尾の狐】というような間違った認識を里の人達に植え付けていたのだ。

本当は里の為にその身を捧げ、その両親と共に犠牲になっていると云うことも知らずに。

ただナルトがかの四代目火影の息子ということすらも、里の上層部により秘密にされ知らされていない一般の里の人達には、その事実を知る由もなかったのだ。

やっぱりこういう状況になってるわな…。

俺はそんな大人たちにほんの少しの殺気と共に一瞥をくれてやると、そのまま黙ってナルトの元へ足を進める。

大人達は俺の殺気にあてられ顔を青ざめ黙ると、キョロキョロと周りを警戒しだした。

三歳の俺が出した殺気だとは思ってもいないだろうな。

俺はそんな状況を無視し、いまだ積み木で遊ぶナルトの目前まで足を進め立ち止まった。

ビクッ――

俺が近付いた事に気付いたナルトは俯いたまま小さく震えた。

まったくまだこんなに小さいっていうのに、周りの大人たちの反応のせいで無意識に萎縮して怯えてやがる…。

俺がそんな事を考えながら目の前で黙って立っていたせいか、ナルトはビクビク震えながら顔をあげ、怯えた表情で恐る恐る口を開い

た。

「……な、なあに？」

え——……

ナルトの発言を聞いて一瞬自分の耳を疑ってしまった。

…気のせいだよな…？

またしても押し黙ってしまう俺。

すると俺が黙ってるのが気になったのか、はたまた黙って見下ろされてるのが怖かったのか、ナルトがまた恐る恐る言葉を紡ぐ。

「…ぼく、なにか…した…？」

な——…なんだって——っ！

俺の体に衝撃が走った。

あの、あのナルトが——

『標準語』……………だと？

そして話は冒頭に戻るのだ。

「お前は……………ナルトか？」

ナルト？の話は完全にシカトな俺、しかしこれは大事な事なのだ。  
人違いかも知れない、木の葉で金髪は珍しいほうだが居ないわけで

はないのだ。

ほっぺたに髭みたいな三本線もあるが、決してナルトである証拠ではない。

そんな俺の中の葛藤をよそに、ナルトラしき幼児はビクビクしながらもきちんと答えてくれた。

「う、うん……ぼくは、うじゅまき、ナルト……です……お、おにいさんは……だれ？」

…やっぱり本人だった。

く、しかし俺は絶対認めねえ！

こんな標準語の大人しい子なんて、ぜってえナルトじゃねえ！

そして俺は決意した。

この日より、俺の俺による俺が満足するためだけの教育的指導【ナルトがナルトラしくあるための言葉遣い】をみっちり教え込む事になるのだった。

主に語尾に『だってばよ』とか…。

まあしかし、まずは初対面なので挨拶は大切。

只でさえ周りから拒絶されているナルトは、幼いながらもそれを感じとり周りに気をつかっているのだ。

まずは仲良くなる事から始めないとな。

「そうか、俺は月影レイ。火影のおっちゃんからお前の事を聞いたんだ。

俺さ、この里にきたばかりで友達いないんだよ。

だからナルト、お前が俺の初めての友達な。」

そう言っただけは口の片端を吊り上げ、ニヒルな笑みを浮かべながら右手を差し出した。

「と、ともらち…。い、いや…ぼ、ぼく、のあいて…は、しないほうか、いいよ…」

しかし、そんな俺の右手には応えてくれず、ビクビクしながら視線を泳がすナルト。

こんな寂しそうな顔…、まだ幼い二歳の子が浮かべる表情じゃねえだろ…。

今まで会話という会話は火影のおっちゃんとしかったことないはず、ましてや同年代の子供と話す事なんて…、周りの大人たちの態度を見れば明白だ。

みんな俺に向けて遠巻きから『その子は止めたほうがいい』だの『こっちにきて他のみんなと遊びましょう』だの抜かしてやる。

周りの大人が意図的にナルトに友達ができないように…、いや、子ども達がナルトと仲良くなならないように遠ざけているのだ。

ふざけやがって…。

俺はそんな周りの言葉の一切を無視してナルトに話し掛けた。

「周りの目などどうでもいいんだよ、ナルト。そんなの気にするな。要はお前が友達が欲しいのか欲しくないか…、俺の友達になってくれるか否かなんだ」

俺の言葉を聞いたナルトは俯いたまま動かなくなった。

いや、こっそり声を殺して泣いていたのだろう。

次に顔をあげたナルトの顔は涙と鼻水でクシャクシャだった。

そして目一杯の気持ちを込めて俺に向かって返事した。

「ともらちに、なって……。おねがい……」

大泣きしながらも懸命に発したナルトの本心がこもった返事。

だから俺も純粋な気持ちで心から返事を返した。

「ああ、今日から俺達は友達だ、ナルト。だからそんな泣くなって……」

そして握手をするために突き出していた俺の右手は役目をかえ、大泣きしだしたナルトの頭を泣き止むまで優しく撫でるのだった。

……………

「月影のこの息子はちゃんと約束を守ってくれたみたいじゃない……。大きな貸しができてしまったわい。……しかし、本当によかったの

オ、ナルト…いい友が出来て。これでわしも少し安心じゃ…」

とある屋敷の一室でこの一部始終を水晶を通して全て見ていたとあるおっちゃん、その光景を見ながら優しく微笑んでいた。

【十一話】うずまきナルト？（後書き）

柄にもなくちょっと真面目な回でした。

こんなのもこれから偶にはいれていきます。

【十二話】封印の書・前編

ナルトに会ったあの日から、俺はよくナルトと遊ぶようになった。

「レイにいちゃん、まってーっ」

無邪気な笑顔を浮かべながら俺の後をトコトコ付いて来るナルト。

あれから俺が居るときは笑顔をみせてくれるようになったのだ、少しは打ち解けてくれたってことかな？

まあ友達関係なのに俺を兄として慕うようになったのは、やはりナルトの中で家族に対しての憧れが強いからなんだろう。

だから俺も強いて拒否はしていない、だが、もう一つの問題は別だ。

それは――…

「おい、ナルト。

語尾にはちゃんと『だってばよ』を付けないと駄目だろ！そんなんじゃない男になれないぞ？はい、やり直し」

「うっ、レイにいちゃん、まって…ってばよ」

うむ、いい子だ、それでこそナルト。

俺はこうして着実に理想のナルト化計画を進めていつている。

このまま教育していけば、いずれ原作通りの言葉遣いをしてくれるはずだ、うん。

後は里のみんなにナルトを落ちこぼれなんて言わせない為にも、この時期から忍者としての修行をつけようと思っている。

もうナルトに悲しい思い…あんな寂しそうな顔をさせたくないのだ。

「ナルト、お前は強くなりたいか？」

「ん？…んゝ、ぼく…じゃなかった…お、おれはつよくなりたいっ！…あつ…、だってばよゝ」

まあ言葉遣いは頑張っではいるみたいだから、ここは突っ込まないでおこう。

それより…、本人がやる気があるという事が大切なのだ。

小さな両の拳を強く握り締め、確かな決意が籠もった目で俺を見つめてくるナルト。

ああ、成る程…、この目が。

綱手のおばちゃ…、いや、お姉さんの気持ちが分かったような気がする。

この目を見ていると信じてみたくなるのだ、真っ直ぐで力強く、そして濁りのない透き通った綺麗なこの目を…。

本当にいい目をしてやる。

「よし、分かった。

それなら俺が修行をつけてやる。途中でへこたれるなよ?。」

「は、はいっ! あっ…お、おうっ!。」

こうして昼間はナルトに修行をつけることになった。

勿論その合間に自身の修行もきちんとやっている。

ただ人目についてもいいように昼間は基礎訓練だけ。

まだバレるわけにはいかないのだ、ナルトにもね。

その日の夜……

「こちらスネーク……じゃなかった。こちらレイ、現在またしても火影邸に潜入中だ、オーバー」

……返事はない、ツツコミもない。よし、周りには誰もいないみたいだな。

俺は今現在またしても火影邸に潜入している、しかし今度は真剣と書いてマジ、だ。

狙いは初代火影、千手一族創始者の柱間が書き記したと言われている禁術の封印の書……そう、ナルトが原作でアカデミー卒業の時に盗んだあの巻物だ。

あの封印の書には木の葉の禁術をはじめ、初代火影が使ってたと云われる木遁秘術、更には木の葉の里に纏わる伝承……即ち、月影一族やその創始者である神仙の事も書き記してあるのだとか。

神仙であり、木遁が使える俺にとってこの巻物は是非とも拝借して

目を通しておきたいものなのだ。

だから今回は本当に誰にも見付かる事なく潜入し、バレないように巻物の内容を知る必要があった。

事前にナルトの散歩と称して火影邸を徘徊し、その完璧な間取りや、巻物がある部屋からそこへの最短かつ安全なルートまでも全て確認、把握済みなのだ。

満を持して挑んだ今日、この俺の辞書に失敗の文字などない。キリッ

俺はまず屋敷内全てのチャクラを探知し、屋敷内にいる全ての生物の位置を完全に把握する。

火影のおっちゃんはまだ政務中…、遅くまでご苦労なこつて。

ナルトは自室にて爆睡中、これは問題なし。

後は至る所に多数の暗部が身を潜めてはいるが、生命の源であるチャクラを完全に隠す事などできない。

よって、俺には位置など筒抜けなのだ。

息を殺し、足音を殺し、暗部達の死角をついて迅速に目的の部屋へと移動…そして呆気なく潜入に成功。

その部屋の棚の中に無造作に置かれてある大量の巻物、この中から目的のブツを探すには流石に時間がかかると思いきや、勘を頼りに探しこれまた呆気なく発見する事ができた。

ビバ・ご都合主義。

まあ後はバレないようにこの巻物を持ち帰るだけ。

ここからがナルトとは違うのだよ、ナルトとは！

俺は印を結び影分身を発動し、もう一人自分を出す。

そしてその影分身もまた印を結び術を発動させる。

『変化の術』

ポフンという音と共に影分身は巻物…封印の書へとその姿を変えた。

一応中身を確認…よし、内容も全く同じだ。

俺は本物の巻物を元あった場所へ戻すと、影分身巻物を手にとりすぐに火影邸を後にした。

これで父上が教えてくれなかった月影一族の事もわかる。

そして初代火影が使った伝説の木遁秘術や禁術の練習もできるわけだ。

うっつ、考えるだけでワクワクしてきた！  
早く読みてえっつ！

しかし俺はふと思考する。

両親がいる家で読むわけにはいかないのだ…、読むなら人目につかない場所…

俺は昼間ナルトと修行をしている森を思い浮かべた。

まああそこなら夜は不気味だし、町外れで人目にはつかないから問題はないだろうと、行き先を決定。

俺は早く読みたいと逸る気持ちを懸命に抑えながら、夜の里を駆け抜けた。

## 【十二話】封印の書：後編（前書き）

大変お待たせしました。

不定期更新で申し訳ないです。

設定の見直しをし、七話と八話を改訂しました。

1、常時右目に神仙眼だったのが、左目は白眼、右目は普通の目に変更。

神仙眼発動後に右目に紋様が現れます。

2、霧隠れ<sup>キリカスミ</sup>を霞隠れに変更。

劇的に内容を変更したわけではないですが、文章を少し追加しています。

それでは、本編をどうぞ。

## 【十二話】封印の書：後編

昼間修行している森に着いた俺は更にその奥深くに進み、人目がないだろう場所の木の根元に腰を下ろした。

手にしてるのは自身の影分身が変化した封印の書の巻物。

俺は一度深呼吸をするとゆっくりと封印の書を紐解き、木々の隙間から顔を覗かせる月の明かりだけを頼りにその巻物に目を通していった。

.....

「.....」

最初に読んだのは一番気になっていた月影一族についての伝承。

俺はこれを読んで言葉を失っていた。

まさかの新事実、本編にもなかった俺が知る原作知識外の未知の領域…。

要約すると、月影一族創始者である『神仙』は実は元、『日向一族』の一人であつたと云うのだ。

『彼』は木の葉隠れの里ができるずっと昔、日向一族の男と千手一族の女との間に生まれた子供であつた。

日向一族の血を受け継ぐ『彼』は勿論一族の血継限界である『白眼』も受け継いでる筈だつた。

しかし、『彼』は『出来損ない』だつたのだ。

本来なら両の目共に『白眼』特有の真つ白な瞳でなければいけない筈の彼の目は、左目だけが真つ白で、右目は何の変哲もない普通の黒眼だつたのだ。

左目だけが『白眼』、だからそんな『彼』は『出来損ない』と呼ばれ、日向一族の者はおるか、その両親にまで気味悪がられ蔑まれ、虐げられていたと云う。

月日が経ち、一族の者達から苛められながらも細々と過ごしていた『彼』だが、遂には一族を抜け一人忽然と姿を消したという。

そして次に日向一族が『彼』を見たのは戦場で敵としてであった。

『彼』は『日向』の名を捨て『月影』と名乗り、他に類をみない『瞳術』と『五つ』のチャクラ属性を操り単身で他の忍を圧倒し、多大な被害を与えたと云う。

その時の『彼』の両目にあった仙人特有の『隈取り』と、他の忍を圧倒した人外のその力に対し、当時の忍は尊敬と畏怖の念を込めて『彼』を『神仙』と讃え、『彼』の瞳を『神仙眼』と称し、それより『月影』の名は一躍忍界にその名を轟かせる事になった。

それから『彼』は老いる事もなく、数百年の時を生きた。

だが『彼』の子供はいずれも『神仙眼』に目覚める事はなかったのだ。

戦場で名を馳せた『彼』はそれだけ敵も多く、『彼』の体の秘密を探ろうと一族を襲う者も多かったという。

そして流石の『神仙』である『彼』も一人で一族全てを守っていく事はできず、年月が経つごとに『月影一族』は追い込まれ、遂には歴史の表舞台から完全に消える事になったという。

成る程…。

俺の目が左目だけ『白眼』だったのはそういう事だったのか。

それに最初の『彼』は数百年の時を生きた…と。

通りで不老不死を目的とする大蛇丸に狙われるわけだ…、やっと納得がいった。

しかし問題は滅んだとされている『月影一族』の生き残りである俺が、更には目覚める者はいなかった…と云う『神仙眼』に、何の因果かこうして目覚めてしまっているという事実。

言ってしまうえば、この体は恰好の実験材料なのだ。

これは流石に秘密にしてないといけないってのはよくわかった。

三歳にして各里の暗部に狙われたくはないからな。

後は『日向一族』との関係…、未だに何か確執があるかも知れない、用心するにこした事はない。

俺は自分が置かれている状況を正確に再認識させられ、その面倒臭さに深く溜め息をつくのだった。

今俺は、気持ち切り替え巻物の複写を行っている。

幾ら俺のチャクラが尾獣並に多かろうと、このまま影分身&変化の術を維持し続けていれば、いずれはチャクラが底をついてしまう。

だからといって一夜で書き記されている文字を全て丸暗記できるとは思えない。

このチートな体なら二日ぐらいあればいけるかもしれないが、流石に二日の間この封印の書をこんな誰が来るか分からないような場所に隠しておくのも危険があるし、持ち歩くなんてもつてのほかだ。

だから俺は今複写しているのだ…、土遁で作った石板に。

これなら土遁で地中に埋めて隠す事も出来る。

流石に、こんな森の中で地中を掘り返すような奴はいないだろうか  
らな。

俺は封印の書の一字一句逃さないように集中しながら、大量に作った石板に土遁を使い文字を掘り刻み込んでいく。

こうした地道な作業が終わったのは既に日が顔を出す頃だった。

久々の面倒臭い作業に疲れを感じながらこの日は土遁で石板を地中に埋めると、影分身を解除し家に帰る事にした。

複写している時に確認した巻物には色んな禁術や、初代火影が使ったとされる木遁秘術までもがきちんと記されていた。

早く覚えたい、早く使いたい…と、俺は年相応の子供のようにその日の夜までそわそわしながら過ごすのだった。

## 【十三話】 神仙眼と五行の属性

両の目を瞑り、精神と肉体を自然と一体化させるように……周りに己の存在を溶け込ませるがごとく自然のチャクラを吸い込み、自身の精神、肉体のチャクラと均等になるように練り合わせ溜め込んでいく。

そうして出来た仙人特有の仙術チャクラを更に万物に存在する陰と陽のチャクラ気質に分け、それを自身の右目に混ぜ合わせるように集め圧縮していく――

### 『神仙眼』

右目だけ開いた俺の瞳には、『神仙眼』：オンミョウ陰陽を意味する白と黒の勾玉が噛み合ったようなマーク、所謂『太極図』の紋様が浮かび上がっている。

俺は何の因果かこの神仙眼に目覚めてしまった。

『半年前』に火影邸に侵入し、手に入れた封印の書には神仙の由来や禁術の事は記してあっても、どんな『術』を使ってたのかまでは

記されていなかった。

だから俺は自力で神仙眼を使いこなし、自身の手によって『術』を生み出していくしかないのだ。

こうして封印の書を手に入れた翌日の夜から禁術や木遁を含め、『瞳術神仙眼』の修行をやっているというわけだ。

だがこの『神仙眼』、如何せん謎が多すぎる、むしろ謎しかない。

分かっている事は一つだけ。

あの日、大蛇丸に里が襲われた時、無我夢中で発動した『刺された筈の父上の背中からではなく、刺した大蛇丸の背中から剣先が飛び出た』という事象だけなのだ。

そしてこれについては粗方検証を終えている。

俺は手に持っていた小石を空中に投げ、それを右目：『神仙眼』の視界に納まるように捉えた。

神仙瞳術――

『墜とし穴』

空中に投げ出された小石は重力に伴い落下し、地面に落ちるという寸前で忽然と姿を消した。

そして姿を消した筈の小石は同時に俺の目の前に現れ、同じようにまた重力に従い落下して地面に落ちた。

これが現在使える俺の神仙眼の力。

パツとみただけでは分からないだろうが、これは『神仙眼の視野に写る空間と空間を繋ぐ』という能力を使ったのだ。

空中に投げ出した小石の下に『他人には見えない空間の歪み』をつくりだし、自分の目の前にも同じ歪みをつくり『見えない道』を作ったのだ。

俺がこの神仙眼で捉えている限り、『道』はどこにでもいくつでも作る事が出来る。

道を作るだけ？と思うかもしれないが、少し考えれば厄介な能力だ

と気付いて貰えるだろう。

しかしこんなチートな能力でも神仙眼の能力の一部にしか過ぎない、神仙眼にはまだ他の使い方がないと俺は感じている。

まあそれは追々自分で研究し、見付けていくしかないだろう。

さてさてこんなチートな神仙眼だが、難点もある。

それは如何せん燃費が悪過ぎるという事だ。

神仙眼は発動し維持するのに膨大な仙術チャクラを喰う。

俺自身の精神チャクラは何故か尾獣並にあるし（記憶を維持したまま転生したのが原因と考えている）、自然チャクラは周りに無限とあるから問題はない。

だが肉体のチャクラの方が先に尽きてしまうのだ。

何故なら俺の体はまだ三歳児。

体を鍛えるにしても器自体が小さければその限界は高がしれているということだ。

これは年月が経ち、体が成長するまでどうすることも出来ない。

それと仙術の方も練習しないといけない俺としては、膨大な仙術チヤクラを使う神仙眼の練習は後回しにせざるおえないのだ。

俺は一度右目を閉じ、ふうっと小さい溜め息を吐くとゆっくりと両目を開いた。

そこに神仙眼の紋様は既になく、何時もと同じ右目は白眼、左目は普通という何とも不気味なオッドアイに戻っている。

俺は直ぐに首に下ろしていた黒染めの帯を目に巻き直し、次の修行に取り掛かる。

既に封印の書の石板の内容は全て頭に叩き込んでおり、石板自体も土遁で土に帰し証拠隠滅はしてある。

俺はここ『半年』の間、繰り返している『五行』と呼ばれる『火・水・木・金・土』の属性変化の修行を始める。

基本となる『火・水・土』の属性はほぼ完璧に使いこなせるようになってきた。

血継限界である『木遁』も封印の書のお陰で、何とか形にする事ができてきている。

只、『金遁』に関してはイマイチ要領を得ていない状況なのだ。

原作では登場していない金遁…、封印の書には金属を自在に操っていたと記してあった。

俺の予想では、木遁（水と土）に更に火の属性を加えた『血継淘汰』ではないかと睨んでいる。

まあ、これに関しても全く情報がないのだから、地道に練習し研究し開発していくしかないのだろう。

だから今日も俺は夜が更けるまで森の奥で一人一心不乱に修行するのだった。

…え？いつ寝てるかだって？

朝、両親が起きる前に布団に潜りこみ、それから何とか毎日三時間は睡眠をとっているのさ。

このチートな体は常に仙人という事もあって、ほぼ寝らずに生活する事もできるみたいだ。

不老不死だっっていわれてるぐらいだから当たり前か。

因みに、不老だからって成長しないわけではないので悪しからず。

ま、こうして俺の修行生活は今後も休まず続けられていくのだった。

【十四話】どこかで見たような…否！オリジナルです。（前書き）

皆さん嬉しいご感想本当にありがとうございます。

夏バテ気味で全くやる気のなかった俺でしたが、少しやる気が起きました！

これからも引き続き応援よろしくおねがいします！

【十四話】どこかで見たような…否！オリジナルです。

木の葉の里の隅に広がる森、第四演習場と呼ばれるこの場所では日夜秘密の特訓が行われている。

今は真夜中、月明かりのみという真つ暗な森の中には現在、異様な光景が広がっている。

木々の間のスペースに所狭しと佇む百人は越しているだろうレイとその影分身達が、ゆつたりと、そして流れるような動きで皆が一切の乱れなく同じ行動…現在で言う『太極拳』の動きを行っている。

これはレイの父親が昼の間にレイに教えた『月影に伝わる武術』らしい。

元は月影の初代頭首である神仙が、日向にいた頃に習っていた柔拳を元にアレンジ…いや、完全にオリジナル化させたのがこの『シュウケン衝拳』なんだとか。

白眼を持たない月影一族はチャクラが流れる経絡系や点穴を見切る事ができない。

だから柔拳のように部位破壊ではなく、殴打の際にチャクラを相手

の体に波紋のように広範囲に広げて叩き込むのだ。

これにより相手体内のチャクラは乱れ、正常な働きが出来なくなり、術も満足に使えなくなるのだとか。

なんだ…、どこかで聞いたことあるような技だな……波紋とか……  
何とかのビートとか……まあ、別にいいか。

取り敢えずこの『衝拳』は柔軟で穏やかな動きと、纏絲勁（テンシケイ）〔螺旋の道理による力の作用方法〕を全身の勁（運動量）を統一的に運用して繰り出される豪快な震脚や発勁が特徴的な、まんま太極拳といえる武術である。

そしてこの衝拳、神仙眼を発動した者が使つと更なる力を発揮する。

万物のチャクラを感じ取り視覚的に見る事ができる神仙の力を用い、空中に存在する自然チャクラを自身の仙術チャクラで殴りつける事が可能なのだ。

そしてそこに起こるのは自然チャクラの波紋…いや、津波。

言うなれば目に見えない衝撃波が起こるのだ。

まあ注意しないといけないのは、力やチャクラ加減を間違つと味方や周囲の物まで問答無用で巻き込んでしまうということ…。

只、それさえ気をつければ、接近戦の際にもし攻撃を避けられてもそれを使い、衝撃波で至近距離からダメージを与えるという事も出来るのだ。

チートな術が使えるからと言って、全ての戦いが中距離から遠距離で行われるわけではないからね。

将来の事も考え、今からでも練習しているに限る。

だから俺は日頃行っている影分身を用いた経験値のフィードバックによる効率的な忍術の訓練に加えて、こうして体術の修行も影分身を使い取り入れているというわけだ。

そして今も尚行われている、百人以上の同じ顔同じ体型の三歳児が完全に動きを合わせ、組織的、機械的に行っている演舞にも見えるその動きは、夜の暗さも相俟ってかなり不気味な光景を築き上げていた。

こんなの夜中に偶然出くわしたら、失禁して気絶すること間違いない。

「レイにいちゃん、これでほんとうにつよくなれるのかってばよ…」

現在時刻はお昼過ぎ、ご飯も食べ満腹な俺とナルトは、食後の休憩も含め俺の家の庭で座禅を組み、頭の上に木の葉を一枚乗せ、精神集中の鍛錬を行っているわけだ。

只、まだ肉体的にも精神的にも幼児なナルトにはこの修行の意味があまり理解できておらず、イマイチやる気になれないようだ。

ま、修行って云ったらずは体を鍛える事ってイメージがあるだろうから仕方がないか。

俺は目を瞑ったまま隣で俺の見様見真似をやってるナルトに”また”一から説明をする。

アカデミーで原作のイルカ先生が言ってた台詞だ。

「ナルト…これは頭の上の木の葉に全エネルギーを集中させチャクラを練り上げる修行だ。

木の葉の一点に集中することで他に気が散らないようにする古くからの知恵のようなものだよ。

集中力を磨いた者こそ立派な忍者。それが大人達がしてる木の葉の額当ての由来でもあるんだぞ？」

と、何度目になるかわからない台詞を言う。

そしてナルトもこの時だけは気合いを入れ直して集中し始めるのだが、また数週間後には同じ台詞を言ってくるのだ。

二歳児だから仕方がないと言えば仕方がないのだが…。

原作で言われている通り、やっぱり馬鹿であり、才能がない…と言わざるを得ないのだろう。

ナルト…、本当にお前は原作通りに、いや、それよりも強くなってくれるのか…？

俺は心底不安で一杯である。

………

「じー……………」

精神修行を始めて三十分程経つ。

これまでずっと無視をしていたのだが、やっぱり気になる…この舐め回すような視線。

隣りにいるナルトも気になるようで若干体内のチャクラが乱れて集中できていないのがわかる。

毎度の事なのでこの視線の犯人は分かりきっている…

「母上……ずっと観てて暇ではないのですか…？」

そう、犯人は母上だ。

庭で座禅を組み、目をつむって座っている俺達の真正面……僅か一メートル先から俺達をガン見しているのだ。

近過ぎだ、非常識過ぎる。我が親ながら不愉快極まりない。

だがそんな母上はいつも悪びれもなく「お構いなくっ」と、満面の笑みで返してくるだけなのだ。

流石にこの状態では精神集中の修行にならないため、俺はナルトを連れいつもの森に移動する事に。

だが、そこでいつものように後ろから母上がこっそり着いてくるのだ。

もうモロバレ。追跡下手すぎ。むしろ私を見つけて！と言わんばかりである。

俺は、はあ〜と一つ溜め息を付き母上に向かって振り返る。そして一言。

「着いて来ないで下さい」

ちょっと冷たいようだが仕方がないのだ。

あの状態の母上が修行についてきたら、最早修行どころでないのは目に見えているのだから…。

そしてそんな俺の冷たい一言により、母上は”いつものように”、たばーと涙を流しながら、「レイちゃんがママを除け者にしたっ！反抗期だっ！うえ〜んっ、パパに言い付けやる〜！」とか言いながら家に向けて走り去っていくのである。

本当に子供ですか、あなたは…。

まあそこが母上らしいと言えばらしいんですが。

そんないつもの日課みたいなコントを終わらせ、呆れ顔のナルトと今日もまた修行を始める。

こんな他愛もない遣り取りだが、俺の中では…前世の俺が望んでやまなかった家族の触れ合いなのだ。

こんな掛け替えのない日常を守る為にも、俺は早く強くならなければならぬ…そんな気持ちを胸に秘め、俺は昼夜問わず日々の修行をこなしていくのである。

【十四話】どこかで見たような…否！オリジナルです。（後書き）

ちょっと地の分ばかりになってしまいましたが、修行&説明編なので仕方がないということに！

次から原作キャラが始めます！

少しフラグ建てたりしていくのでご期待下さい！

【十五話】日向のお嬢様：前編（前書き）

少し文が短いですが、申し訳ない。

前編、後編に分けてしまったせいです。

後、地文が多いのもシリアスなもの、今は勘弁して下さいな。

キャラが増えてきたら、自然と会話も増えていきます。

そしたらギャグも下ネタも入れていきますので！

【十五話】日向のお嬢様：前編

四歳になった月影レイだ。

相も変わらず昼夜問わずの修行の毎日を送っている。

だがそんな子供らしくない俺に対し、最近両親が不満だとアピールしてくるのだ。

もつと一緒に遊びたい、世話したい、甘えてもらいたい、と両親揃ってあーだこーだと駄々をこねてくる始末だ。

やれやれ、これじゃどっちが子供か分かったもんじゃない。

まあそんな両親だが、俺の大切な家族には変わらない。

だから俺も偶に両親の言うことも聞いて一緒に出掛けたりもしているのだ。

先日だって、木の葉で行われた盛大なセレモニーに両親と俺とナルトで見物に行った。

長年木の葉と争っていた雲の国の忍頭が、同盟条約の締結のため木の葉に来訪したんだとか。

……あれ、何か原作で重大な事件が起こったような記憶が…。

……思いだせないのだから俺の生死に関わるような事じゃなかったのだろう。  
気にしない気にしない。

まあ、セレモニー自体はお祭り騒ぎで賑やかなものであったし、出店とかも一杯出てたのでナルトとか母上とか特に目を輝かせて見て回っていた。

ナルトは生まれて三年だから仕方がないとして、母上も生まれてこのかた月影の秘境から出た事がなかったんでこんなお祭り騒ぎは初めてだったんだろう。

二人のハシヤぎようといったら、俺まで恥ずかしくなるほどだった。

…何だかんだ言っても、実際は俺も内心少し楽しませてもらったんだが。

……少し話が逸れたな…、話を戻すが、俺が子供らしくないっていうのは今更どうしようもない事だ。

だって中身は既に二十歳越えてるのだからな。

だが周りのみんなは俺が転生してるって事を知らないし、俺だって今後誰にも話すつもりはない。

話たってメリットなど何もないのだから。

取り敢えず俺は近所の人達に変な子に見られようと、両親が駄々をこねようと、子供らしくするつもりは毛頭ない。

俺は出来るだけ早く、出来うるだけ強くなりたいのだ。

俺がもし不老不死の体で、無限に時間があるのだとしても…。

俺が守りたいものは、今、この時間、この場所に存在しているのだから。

だから、俺に子供である時間など必要ない。

今、俺は数日前の安易な自分の考えを悔やんでいる。

なぜあの時思いださなかったんだ…。

俺はそんな今更どうしようもない事に唇を噛み締めながらも、ある人物を追っている。

時を遡る事数分前、俺はいつも通り一人、森の奥で修行をしていたのだが、そこでこの森を横断するように高速で移動している二つのチャクラを感じとった。

一つはセレモニーの時に感じたチャクラ……雲の国の忍頭のチャクラだ。

そしてもう一つ、その忍頭の脇に抱き抱えられた微かなチャクラ。

その反応は酷く弱々しく、何らかの術に掛けられているのは明白だった。

そして俺はここで今更になって原作を思い出したのだ。

日向一族宗家の嫡子、日向ヒナタの誘拐事件の事を…。

それに気付いた俺は、後先考えなしにそのチャクラを追い掛け駆け出していた。

原作ではこの忍頭を日向ヒアシが殺した事により、雲の国が条約違反と言い張り、白眼の血継限界を持つ日向宗家…ヒアシの死体を要求してくる。

その後色々ないざこざがあり、分家ヒザシが影武者として身代わり

になり、その息子である日向ネジが宗家を深く恨むようになってしまふのだ。

つまりは、あの忍頭を生きたまま捕まえる事が出来れば、ヒザシは身代わりにならずにすむし、ネジも宗家を深く恨まないですむようになるはずなのだ。

只、問題は相手を生かすのなら、俺の存在を知られてはいけないという事だ。

顔はおろか、背格好、声や術に至るまで知られるわけにはいかない。隙をつき、こちらを感じられる前に気絶、惑いはそれ相応の状態にした上で捕縛しなければいけない。

そして前提条件は勿論、日向ヒナタを無傷で奪還。

相手は原作では簡単にやられていたように描かれていたが、腐っても忍頭だ。

それ相応の実力があるとみて間違いない。

今の俺で出来るのか…。

いや、男ならここはやるしかないだろ？



【十五話】日向のお嬢様：後編（前書き）

嬉しい感想を貰ったことにより、調子に乗って続けて投稿してみました。

自分が伝えたい事が皆さんにちゃんと伝わるかはわかりませんが、これが作者の精一杯です。

拙い文章で本当に申し訳ない。

頭に構想はあるのにそれを文章に出来ない自分の実力がもどかしい…。

【十五話】 日向のお嬢様・後編

忍頭は森を突っ切り真っ直ぐに木の葉の里の外側に向かっている。

どうやって結界が張つてある木の葉に侵入したのかは知らないが、恐らくパレードの時に下準備をしていたのだろう。

あのまま真つ直ぐに進んでも塀と結界しかない。だが出る手段も用意してるとして間違いない。

俺は忍頭を追いかけながらも、目元を隠している帯を首に下ろし、両目を瞑りチャクラを集めた。

神仙眼

右目を開け、周囲百メートルに誰もいないのを確認して瞳術を発動させる。

神仙瞳術：

空渡り

自身の目の前に等身大の空間の歪みを発生させ、進路方向：視界に映る最遠の場所に更に歪みを作り『道』を作る。

そして目の前の歪みをくぐり抜ければ、最遠に作った歪みの場所に出るのだ。

視界に映るエリア内を一瞬で移動出来る短距離専用の瞬間移動忍術。

自身が通り抜けた後は視界から外れるので歪みも消える。

そしてまた新たな歪みの道を前方に作り出し、それを繰り返すのだ。

今の俺のチャクラ量では少々厳しい移動手段だが、今から誰よりも先に追い付くためにはこうするしかない。

俺は三度、四度『空渡り』を繰り返し、漸く視界に忍頭の背中を捉える事が出来た。

よかった、まだ周りに日向の追っ手のチャクラは感じない。

日向のお嬢さんもまだ無事のようにだ。

俺は一旦歩みを止め視界に忍頭を捉えたまま地面にしっかり足をつけ、衝拳の構えをとる。

右手の指先を上に向け、手の平を前に向けた状態で脇の下に、左手の指先は下に向け、右手と同じようにして脇の下で構える。

両の足は肩幅より少し広く開き、交互に体重移動させる。

正中線は真つ直ぐに、視線は相手を捉えて離さない。

すうー…と息を吸い込み――

ショウケンホウハツケイ  
衝拳法発勁――…

インヨウシンショウ  
『陰陽津掌』

ドンつと、震脚により地面に足が軽く埋没し、そこで発生した『勁』を、そのまま体重諸共乗せ、両の手の平を前へと突き出す。

その手の平の行き着く先は前方に作られた小さな空間の歪み。

そこを通った俺の両の手は、未だ気付かず宙を駆けている忍頭の死角…背中 of のすぐ後ろにある空間から飛び出し、そして吸い込まれるようにその無防備な背中に命中した。

手の平から放たれた仙術チャクラが直接忍頭の体内に押し寄せ、津波のように蹂躪し、その体内の経絡脈や内蔵機関に小さくない損傷を与えていく。

宙空で不意をつかれた忍頭は錐揉み回転を加えながら近くの木に激

突し、何が起きたか分からぬままその意識を手放した。

空中に投げ出されていた日向の嫡子、日向ヒナタは俺の瞳術『墜とし穴』により、今は俺の手元に強制移動させた所だ。

「何とか無事に助け出せたみたいだな…」

未だ目を瞑り苦しそうに眠っている日向のお嬢さんに視線を落とす。

まだ三歳という小さな体、そしてその真っ白な肌には彼方此方痣の後がある。

日向の嫡子として毎日厳しい稽古をしているのだろう。

黒く艶やかな髪は武術に支障がない程度に切りそろえられており、前髪パツツンと相俟って故郷日本を彷彿とさせる趣がある。

今は閉じられている瞼の下にある瞳は日向家独特の白い瞳なのだろう。

全体的にみても目鼻顔立ちが整っている事からも、将来はきっと美人さんになる事は間違いない。

これで極度の人見知りでなかったらさぞかしモテるだろうに…

う…う…

不意にお嬢さんがぐもった低い呻きをあげる。

観察してる場合じゃなかったな…、多分幻術と、この顔色からして更には何かの薬物を飲ませてあるのだろう。

彼女の体内のチャクラはぐるぐると渦巻き、方向性を失い乱れている。

俺は急ぎ忍頭の所に向かい、近くに彼女を横たえた後、逃げられないように忍頭を本人の服で雁字搦めに縛り付けた。

そして今一度日向のお嬢さんに視線を戻す。

さっきよりも若干苦しそうにしており、このまま日向の追っ手が見付けてくれるまで放置だと彼女の身がもたない可能性もある。

俺は彼女の横に移動し、横になっている彼女の体に両手の平を当てると、自身のチャクラを彼女の体内に流しこんだ。

導くように、本来の流れに戻すようにチャクラを流し、彼女に掛けられた幻術を解く。

少し顔色が良くなっているが、まだ苦しそうで息も乱れている。

やはり薬を盛られているのは間違いないだろう。

だが薬学の知識がない俺では、完全に治す事は出来ない。

しかしこのまま何もしないという選択肢はなかった。

俺は座禅を組み、自身の丹田（おへその下の辺り）に両手を翳し、チャクラを集め錬りあげていく。

内丹術——つまりは人体に内在する根本的生命力である『気』を集、活性化させ心身のあるべき状態に戻す——その『気』の塊を彼女に送り込む事により彼女自身に薬に対抗してもらおうというわけだ。

今俺の両手の平の間には綺麗に輝き多彩な色を放つ視認出来る程のチャクラの球体が浮いている。

俺はそれをそつと両手で持ち上げ、彼女の丹田の上へと誘導する。

両手を離すと暫く空中に滞空していたチャクラ球だが、ゆっくりと沈み込むように彼女の体内に溶け込んでいった。

暫くして彼女の顔色が段々、生を取り戻し、呼吸も規則的に行われるようになっていく。

どうやら俺の『気』は上手く彼女に馴染んでくれたようだ。

まだ安心は出来ないだろうが、暫くは大丈夫だろう。

後は日向の仕事だ。

それに流石の俺も神仙眼の多様で疲れた。

今日はもう帰って休む事にするか…と、俺は帯を目元に巻き直し、一度深呼吸をする。

ふと、俺は意識の隅に幾つかのチャクラ反応を感じた。

日向一族の屋敷の方からこちらに向かって真っ直ぐ高速で移動してきている。

先頭を駆けるチャクラ…どことなく日向ヒナタに似ている感覚があることから、多分親族…ヒアシで間違いない。

どうやらやっとな誘拐されたのに気付き、急ぎ追い掛けてきたのだろう。

しかし遅過ぎないか？

まあこうやって実際に助かってるんだから今更どうでもいいことか。

俺は後の事は全て日向に任せる事にし、彼女…ヒナタの頭を一撫でした後、速やかにその場所を後にした。

数分後、白眼を用いて搜索していた追跡部隊により、ヒナタは無事に保護され、雲の国の忍頭も生きたまま捕縛されたという。

一件落着　――　…

…と思いきや、この俺の行動によりこの先更なる事件？が俺を待っているのだった。

**【十五話】日向のお嬢様：後編（後書き）**

この次は他人目線…

ヒナタちゃんとヒアさん目線でお送りします。

【十六話】日向一族嫡子誘拐事件：前編

うう……ぐすっ…ぐすっ……うっうっ……

この間私が三歳の誕生日を迎えた日から父上との毎日の修行は厳しくなる一方…

あまり修行の成果がでない私に、父上はどこか焦っているような雰囲気でもいつも私を怒ってくる。

「お前は日向一族宗家の嫡子なんだぞ…！」とか「これぐらいやれないでどうする…！」とか…

私だって精一杯頑張ってる……でもどれだけ頑張っても上手くできないんだもん…

そして今日、私は父上に反論してしまった。

「す、好きで宗家に生まれたわけじゃない…！」

柄にもなく声を張り上げて反論した私に、父上は一瞬悲しそうで…  
そしてどこもなく申し訳なさそうな複雑な表情を浮かべた後、また  
すぐにいつもの厳しい表情に戻り、私の頬を思いつ切りひっぱたい  
た。

周りの他の日向の人達が啞然とする中、私は号泣しながら父上に対  
し「父上なんか…だいつきらい！」と吐き捨ててその場を後にした。

それから屋敷を飛び出た私は、こうして近くの川縁で座り込み反省  
している。

父上…やっぱり怒っているかな…？

今からでも謝りにいったほうがいいのか…？

そんな事を考えながらウジウジしていると、周りは既に真っ暗にな  
っていた。

……うん…父上にはちゃんと謝ろう。そしてまた明日から修行頑張  
ろう。

そう決意し、立ち上がるうとした時、後ろから…ザッ…と何かの音  
が聞こえ、私はその音に内心ビククリしながらもゆっくりと振り返  
った。

そこには、私の世話&護衛役である日向分家のコウが血だらけで倒れていた。

「お…嬢さ、ま…お、逃げ…くだ、さい…」

え…？——何が起きてるのか分からず呆然と立ち竦む私に、コウは息も絶え絶えにそう伝えてくる。

だが私の思考はそこまでだった。

この後幻術を掛けられた私は抵抗することも出来ずに誘拐される事になる。

……………

「す、好きで宗家に生まれたわけじゃない…！」

我が愛しの娘ヒナタが、生まれて初めてみせた私への反抗……。

や、やつぱり、厳しすぎたか…？いや…だがこれくらい厳しくしないと分家の者…我が弟ヒザシや、その息子ネジに示しがつかないの

だ。

だから甘やかす事などできぬ…。

どうか、耐えてくれ…ヒナタ。

そうして気持ちを一新した私は、愛する娘の頬を初めて思いつ切り  
ひっぱたいた。

「父上なんか…だいつきらい！」

……

ゴフツ……

血を吐き膝と手を地面につき倒れ込む。

何という一撃……まさかここまでの必殺技を隠していようとは、我  
が娘ながら末恐ろしい……。

クツ……ふらふらしながら立ち上がる私に、周りの一族の者が、呆  
れ顔で心配してくる。

ええーいつ！そんなジト目で私を見てくるでない！

私は周りの視線から逃げるようにして自室に戻った。

ヒナタは大丈夫だろうか…。

ひっばたいたのはやり過ぎだったろうか…？

このままヒナタが家出したら、私はどうすれば…。

一人部屋の中を行ったり来たり、右往左往しながら思考の海にダイブする。

……

どれだけ時間がたったのだろうか、気付けば外は真っ暗であり、既に月が登っている。

あれ、私はまだ晩飯食べてないんだけど……誰も呼びにきてくれないなんて……。

本当は何度も呼ばれていたのだが、思考の海深くにダイブしていた私は気付いていなかったみたいだ。

そうして部屋を出ようとした私の所に、一族の一人が息を切らして走ってきて、衝撃の事実を知らせてきた。

「はぁ…はぁ…ヒアシ、様…ヒナタ様が…ヒナタ様が、屋敷を飛び出してから…はぁ…まだ、戻られて、ないみたいなんです…」

！！！？？！！？

なん…だと？

その知らせを聞いた私は直ぐに搜索隊を結成、屋敷周辺を隈無く搜索させた。

そして近くの川縁で血だらけで倒れているコウを発見したのだ。

「ヒアシ、様…すみません…お嬢様が…お嬢様が…何者かに連れ去られて、しまいました…私が…不甲斐ない、ばかりに…」

血を吐きながらもそう伝えてくるコウを誰が咎める事が出来ようか…この傷からして、体を張ってヒナタを守ろうとしたに違いない…。

「お前はよくやった。すぐに治療の出来る者をよこす。お前は今はらくここで耐えてくれ。…私はすぐにヒナタを追う…!」

私の言葉を聞いたコウは安心したのか、少し申し訳なさそうにしながらも嬉しそうに微笑み、気を失った。

これは一時の猶予もないようだ。グズグズしている暇はない。

私は近くにいた者にコウを任せ、搜索隊の面々に指示を飛ばす。

「一族で動ける者は全て駆り出せ!!木の葉の外周壁に一番近い方面を中心に風潰しに搜索するんだ!!ヒナタが無事であれば犯人の生死は問わん!!後は各自の判断に任せる!」

ヒナタ…どうか…どうか、無事でいてくれ…。

散つ、と各々が各方面に散る中、私も気持ちを切り替え白眼を最大出力で発動。

「私も出る!数名着いてこいっ!!」

…手遅れになる前に。

こうして私は白眼で周囲を索敵しながら、外周壁に一番近い第四演

習場へ向けて駆け出した。

【十六話】日向一族嫡子誘拐事件：前編（後書き）

ヒアシの性格がおかしい？

……仕様です。

【十六話】日向一族嫡子誘拐事件：後編

ん……ん……

……

何やら暖かいものが私の中に溶け込んでくるのを感じる。

それは優しく、穏やかで、私の全てをやんわりと包み込んでくれるような……とても暖かな感覚。

……酷く安心してしまっている自分がいる。

暫くこの心地良い感覚に身を委ねていたけど、ふと、疑問が浮かんでくる。

……ん……あれ……？

私は、今まで何をしてたんだっけ……？

眠ってた……？

私は私自分が今どうゆう状況なのかわかっていなかった。

…ここは……どこ？

真っ暗……あ……

ここまできて漸く自分が目を瞑っている事に気付く。

なにやってるんだろあ…とか思いながら臆気な思考に鞭を打ち、私は未だに気だるく重たい瞼を何とか持ち上げていく。

うつすらと霞む視界、そこに真っ先に映ったのは——私が知らない男の子の顔だった。

見た目は私より少し年上ぐらいの男の子…其れなのに受ける印象は私よりずっと大人っぽくて凄く落ち着いた雰囲気纏ってる。

端正で整った顔付きに、月明かりを反射しキラキラと煌めく綺麗な銀色の髪。

綺麗だなあ…とか夢現な思考でウットリしながらも更に彼を観察していく。

視線を少し下げると、歳不相応な鋭く切れ長の目に…そこから覗く左右非対称な瞳の色…。

片方だけ…白眼…？

日向の人？それにしても屋敷で見かけた事がないし、片方だけとか話にも聞いた事がない。

だが彼の片目は明らかに白眼特有の全てを見透かすような真っ白な瞳だ。

私は吸い込まれるように彼の瞳をじっと見詰めていた。

……あつ…

だけど彼は何故か黒い帯で目元を隠してしまった。

もつと見てたかったのに…。

あう……何思ってるんだろ、私…。

途端に顔が熱くなっていくのを感じる。

…彼にバレてないかな…。

そんな私の心配を余所に、彼は私の変化に全く気付く素振りを見せない。

それはそれで寂しいなあ、と内心へこんでいる自分がいる。

なんでこんな感情が生まれるのか今の自分では分からない。

ただ分かる事は、彼の事をもっと知りたいと思ってる自分がある事。

貴方は一体何者なの…？

声に出して聞いてみたいけど、生憎口を動かせる程体が覚醒していないみたい。

貴方が何処の誰で、何故ここにいるのか。

どうして私はここにいいのか。

聞きたい事は一杯あったのに…、そんな私の視線に最後まで気付いてくれなかった彼は、私の頭を一撫ですると、風のようにどこかへ去ってしまった。

はにゅう…

頭撫でられちゃった…えへへ…。

一人取り残されたのに…、この時の私はそんな事お構いなしに撫でられた事に対する余韻に浸り、一人悦に入っていたのだった。

.....

どこだ…どこにいった…！

持てる最大速度で追い掛けているにも関わらず、犯人の姿は一向に見つからない。

コウの傷はまだ新しかった、誘拐されてからそう時間は経ってなかったはずだ。

だから既にこの白眼が捉えていてもおかしくないはずなのに…。

まさか方向が違う…？

いや、有り得ない。

日向の屋敷は里の隅の方にある。

そこから里を出るにはこっちに向かうしかないはずなのだ。

ヒナタを抱えたまま街中を行くとは到底思えない。

だからこそ里から出るに一番近い外周壁があるこの方角に当たりをつけて追い掛けているのだ。

しかし、私の勘が間違っていたら……？

既に犯人は里の外に出ているとしたら……？

頭の中に最悪のイメージばかりが浮かび上がってくる。

ヒナタを失う——……

ぶんぶん頭を振り思考を飛ばす。

私は一体何を考えているのだ……そんなことあつてはならない。

時間が経てば経つほど悪いイメージが頭を支配していく。

ヒナタ……無事で——！！！！

「見つけた！！一時の方角……第四演習場の中だ！！！」

白眼がヒナタを捉えた。どうやら寝かされているようだ。

近くにいるのは——……男の……子……？

彼が犯人だとも……？

違う……あの背中の家紋には見覚えがある、一体何処で——……

私がそう考えている間に、その少年も私達の存在に気付いたのだらう。

どういう方法で感知されたかは分からないが、少年はヒナタを一撫でするとその場を離れていった。

あ…の…ガ…キ…

私でもまだ触った事がないヒナタの頭を…！！

…っていかんいかん、それよりもヒナタの安否の確認が先決だ。

私は湧き上がる殺意を懸命に抑えながらヒナタがいる場所へと急ぐ。

そしてやつとの事で見付けたヒナタだったが、何故か頬を赤らめて両手で顔を隠しながら、いやんいやん言いながら地面を転がっていた。

新手の幻術にかけられているのか！？

調べてみるが別段そういうわけじゃなかった。

幻術は掛かっていた痕跡があったが既に解除されており、薬物の反応も見られたが何故かそれも綺麗に収まっていた。

あの少年がやったのか…？

いや、そういう事は後でもいいだろう…今は先ず――

「ヒナタよ、すまなかった。馬鹿な父を許してくれ……そして、無事で本当に何よりだ」

何が起きたかイマイチ分かってない表情を浮かべるヒナタを、私は力一杯抱き締めた。

周りで見ている日向の者も今回ばかりはその瞳に涙を浮かべて見守ってくれている。

本当に…良かった。

.....

ヒナタを連れて家に帰り、二人で色々と話をした。

どうやらヒナタ自身は誘拐された自覚がなかったようだ。

…色々思う所はあるが、怖い思いをしてなかったんだから、良しと

するか。

そして肝心の少年についても話を聞いてみたが、ヒナタ自身も誰なのか分からず、気付いたら目の前にいたのだそうだった。

しかし、ヒナタの話の中に聞き捨てならぬ言葉が混じっていた。

その少年の瞳は片方が白眼だったと言うではないか。

片目が白眼…、そしてあの月をモチーフにした家紋…。

私の中で記憶の欠片が繋がった。

部屋に厳重に保管してある文献を漁る。

ヒナタが目をまん丸くして首を傾げている、可愛い…が今はそれどころではない。

——…あつた。

日向に伝わる昔の古い文献。

そこには古ぼけた羊皮紙に古ぼけた字で『日向と月影』と書かれている。

私はハテナマークを浮かべるヒナタに、部屋に戻って休むように言い自室から出てもらった後、自身はこの文献を夜通し読み漁った。

そこに記されてあったのは、月影と日向の関係性…そして神仙に纏わる伝承。

あの少年は日向との因縁を知っていたのか…？

何を思いどんな理由でヒナタを助けてくれたのか…。

それにヒナタの近くで縛られて転がされていた犯人…私はその顔を見て驚愕した。

まさか雲の国の忍頭だったとは誰も思うまい。

あの時私達が先に追いついていたら、感情に流され、怒りのままに犯人を殺していただろう。

さすれば、雲の国はこれ見よがしに一方的な要求を突き付けてきたに違いない。

あの少年はそこまで分かっていた生け捕りにしてくれたのか…？

聞きたい事は山ほどある…、少年とは一度話をしてみる必要があるだろう。

私は少年に対する感謝や興味、不安などが無い交ぜになった複雑な心境を胸に、文献をゆっくりと閉じた。

【十六話】日向一族嫡子誘拐事件：後編（後書き）

ヒナタの思考が三歳児とは思えないくらい大人びていますが、気にしないで下さい。

女の子は早熟なんです！…そういう事にしています。

感想やご意見お待ちしております。

拙い描写でちゃんと伝わってるのか心配です。

独り善がりの文章になってるなら指摘をお願いします。

ガラスのハートなのでなるべく優しくお願いします…更新速度に影響されますので。

【十七話】日向のオッサンと月影の幼児：前編（前書き）

すみません、間があきすぎました。

短い上に、上手く書けませんでした。

間があきすぎて、自分の小説の書き方を見失ったようです。

【十七話】日向のオッサンと月影の幼児：前編

ヒナタ誘拐事件から数日が経った、ある日。

俺は何時ものように第四演習場の森の中で、ナルトと二人日課である修行を行っていた。

だが、その何時もと変わらない日常も、ある来客達によって邪魔をされる事になる。

ひー…ふー…みー…よー………全部で六つか…まだ昼間だったのに  
穏やかじゃねえなあ。

感じとつたのは俺とナルトを囲むように森に身を潜める六人分の気配。

まあ、殺気を感じない事から刺客とかではないんだろうが……ただ、  
こないたいけな幼児達に一体何の用なんだ…？

俺はあくまでも気付いてない素振りをしながらも警戒は弛めず、相  
手から接触してくるのを待つ。

相手はわざわざ気配を抑えてるんだ、それに俺が気付いちまったら只の幼児じゃないって自分から言うようなもの。

現にナルトは全く気付かず、熱心に筋トレの真っ最中だ。

まったく…用があるなら早く来てくれないかねえ。

暫く遠巻きにこちらを伺っていた謎の集団達だったが、漸くその中の一人が俺達の前に静かに姿を現した。

急に現れた人影にナルトは目に見えてビックリしている。

やべ…来てるの判ってたから驚いたりアクションするの忘れてた…。

と、内心そんな事を思いながらもゆっくりと視線を現れた人影に向ける俺。

そして俺の視線が捉えた先には、ゆったりとした和服に黒色の髪、そして真っ白な瞳を持つ見知らぬ男性が立っていた。

あれ…その格好って、まさか…

俺の背中を冷や汗が流れる、これはマズいと本能が警報を鳴らすけど後の祭りである。

俺の心情なんてお構いなしに、目の前の男性は俺に視線を合わせ、端的にゆっくりと用件を告げた。

「月影レイ様ですね？」

日向家当主、ヒアシ様が先日 of 件でお話があるそうです。  
ご同行お願いします。」

今俺の前には白い和服に、肩下まである黒色のストレートヘア、そして透き通るような真っ白な瞳のオッサンが鋭い眼光で俺を睨み付けてきている。

結局、有無を言わず拉致られる事になった俺は、ナルトに自主練を言い付けて留守番をさせ、里の隅にある日向のでっかい屋敷に連行されてきたわけだが…。

通された部屋には、既にこのオッサンがどっかりと座っていて、終始無言で俺を睨んでくるというわけだ。

現在進行形で…。

まあ俺は目元を帯で隠してる為、目線がきっちり合ってるわけではないんだが、こんな穴があくように睨まれてたら凄く居心地が悪い…。

オッサンからの視姦プレイに耐える事十分弱…、漸くオッサンが口を開いた。

「ヒナタ…、娘は、やらん」

いや、開口一番に何言ってるのこのオッサン…。意味がわからないんですが。

雰囲気はかなり真剣だから突っ込むわけにはいかないし…。

つか、娘って…やはりこのオッサンが日向家当主である日向ヒアシか。

今は取り敢えずこのオッサンと意思の疎通を計るために自身も口を開く事に。

「意味が判りません。

私は娘さんとは面識がありませんし」

子供らしからぬ言葉遣いだが仕方ない、今更子供っぽい口調なんて俺にはどだい無理な話だし。

「お前が先日、我が娘…ヒナタを助けてくれた事は判っている。隠さずともよい」

むむ、バレていたのか…  
やはり計画性のない迂闊な行動に出たのが間違いだった。  
しかし、やってしまった事は仕方ない…ここは口八丁で切り抜けるしかないな。

「確かに先日第四演習場にて、とある女の子を助けはしましたが…。  
それが日向家縁の者であつたのは存じませんでした」

目のオッサンの眼光が一際鋭くなる。  
そして威圧するかのように低くゆっくりと言葉を發した。

「それでは我が娘を助けたのは偶然であり、他意はないと申すのか…？」

その言葉に俺は、はい。としつかりと首を縦に振る。

するとオッサンは少し安堵したかのように息を吐き、先程の威圧感を収めると優しい口調で言葉を続けた。

「ふむ、そうか……。此度は我が娘、ヒナタを助けてくれたこと、心より感謝する」

そう言っただけで頭を下げるオッサン。

正直、堅物だと想像してたから素直に頭を下げたのはビックリだ。

「ただ、だが娘はやらんぞ」とボソッと聞こえたのは聞かなかった事にしておこう。

オッサンは話を一端区切るように小さく咳払いをすると、再び真剣な空気を漂わせ再度話を始める。

「んんっ…、何故あのような時間にあのような場所に居たのかは聞かないでおこう。」

しかし、他に2、3聞きたい事があるのだが…よいか？」

明らかに先程までと空気が違う。

此処からが本題か…。

「はい、私に答えられる範囲であれば」

まあ今回の件で色々バレてるだろうからな。

下手に詮索されて探られるよりは、きっちり話し合って釘をさしておいたほうがいいだろう。

【十七話】日向のオッサンと月影の幼児：前編（後書き）

真面目な話が続きます。

ヒアシ様も90%真面目モードです。

【十七話】日向のオッサンと月影の幼児：後編（前書き）

皆さんからの嬉しい感想を読み直し、何とか少しやる気が回復しました。

こんなしょうもない作品を待ってくれてる人がいるのか疑問ですが、感想をくれる人が居る限り頑張っ更新していきたいと思います。

【十七話】日向のオッサンと月影の幼児：後編

「君は『神仙』という言葉聞いた事はあるかね…?」

ピクッ——いきなりの核心に思わず体が反応して、眉が僅かながら吊り上がる。

「…はい、その事に関しては父上より一族に伝わる伝承として伺っております」

何とか平然を装い、すぐさま当たり障りがない返事をしたが、内心は冷や汗が止まらない。

「では、日向と月影との関わりについても話は聞いておるかね…?」

「はい…。我が月影一族の祖先は元を辿れば日向一族の一員であったと聞いております」

ふむ…と呟き、黙るオッサン。

視線はこつちを捉えたままだが、何か言いたい事を切り出せないでいるようだ。

ここからが一番聞きたい事って事か…、まあ待つしかないな。

それから暫く沈黙が続いたが、オッサンは意を決したのか一度咳払いをすると、先程までとは打って変わって申し訳なさそうな口調で話し掛けてきた。

「…こんな一方的な願いをするのは娘の恩人に対して申し訳ないとは思ってるんだが…私も一族の長として、きちんと確かめておかないといけない事があるのだ…」

オッサンは一度間をあけると、頭を下げながら言葉を繋げた。

「その帯に隠された、君の目を見せて欲しい…」

やはり…か。

どこでどうやってバレたのかはわからないが、俺の左目に白眼が宿っているのを知ってるのだろう。

それは俺が神仙の再来だって事に繋がる。

即ち、先祖の念からいうと日向とは敵対関係にあるわけだ。

当主として、知ってしまったからには確認して対処しないといけな  
いって事が…。

どうせ日向家にバレるのは時間の問題だったのだ。

ここはオッサンの判断に任せるしかない。

未だ頭を下げたままのオッサンに頭を上げるように言い、俺は自身  
の目を隠している帯に手をかけ解くと、閉じていた目をゆっくりと  
開いた。

静かな室内にオッサンの固唾を呑む音が響く。

「…そうか、やはりか…」

静かに響くオッサンの声、そしてオッサンは続けて俺に問い掛ける。

「君は…日向を恨んでいるかね…？」

俺とオッサンの視線が合わさる。

その瞳は微かに揺れていて、不安の念を隠せないといった様子だ。

まあ俺の答えは一つしかない。

「祖先の気持ちも分からないではないです……。ですが所詮は話で聞いただけの伝承での事。今のこの平和な時代に昔の恨みを持ち込む程、祖先の話に思い入れはありません。だから私は日向家に対し、恨みの念など微塵も感じておりません」

俺の話聞いたオッサンは目に見えて安堵の表情を見せた。

同時に張り詰めていた空気も弛んだようだ。

するとオッサンは一度立ち上がると机の横に移動し、両膝と手のひらを床につけると、俺の顔を真っ直ぐに見ながら凜とした声を発した。

「月影の祖先に対して我が日向の祖先が犯した愚行、私が一族を代表して心よりお詫び申し上げます。本当に申し訳なかった…」

そしてオッサンはゆっくりと頭を床につけた。

まさか土下座までするとわな、このオッサンにはビックリさせられっぱなしだ。

流石日向家当主と言った所か。

いつまでも土下座させておくわけにもいかないし、俺は早々に返答する。

「頭をお上げ下さい、ヒアシ様。日向家の謝罪は一族を代表してこの月影レイが確かに受け取りました。もう月影の一族は私と父上と母上の三人しかおりませんが、両親には私のほうから伝えておきます」

俺の返事を聞いたオッサンは頭を上げ、すまないな…と、俺の顔を見て穏やかな微笑みを浮かべる。そして俺もそれに応えるよう微笑み返した。

この後オッサンには俺の目の事は誰にも口外しないと約束してもらい、困った事があつたら何でも言ってくれと、嬉しい言質もくれた。

これで俺の不安も少しは楽になった、一安心だな。

そして漸くこのかたつ苦しい会話から開放されると思いきや、話はこれで終わりではなかったのだ。

「…して、話はここからが本題なわけだが…」

って、さっきまでは本題じゃなかったのかよ！

と、オッサンのいきなり発言に心の中で盛大に突っ込みを入れる俺。  
確かに本題とは一言も言ってなかったけど、あれより大事な話って  
…何さ？

【十七話】日向のオッサンと月影の幼児：後編（後書き）

短くてすみません、区切りがいいところで終わって起きたかったの  
で…

次からは他人目線。

皆さんお待ちかね？のヒナタちゃんも登場します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1852t/>

---

～三人目の予言の子～

2012年1月12日20時00分発行